

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

竜宮童子

佐藤家の昔話（十五）

編 武 田 正

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

竜宮童子

佐藤家の昔話(十五)

編 武 田 正

竜宮童子

佐藤家の昔話

15

1 俄か長者
2 わらみご長者
3 節分の鬼
4 手品つかい
5 南山の馬鹿どの
6 巾五間長さ十間の大灯籠
7 命の親玉
8 駱駝
9 ライオンと熊
10 温泉湯治の由来
11 海の上でも歩けそうだ
12 雨の降る孔
13 餅つき

5 8 11 13 14 16 17 17 18 21 23 23 24

14 めぐらと提灯
15 おしとニワトリ
16 塙保喜一
17 すりまげ
18 鮭女房
19 ガニ滝とウナギ滝
20 ナマハゲの由来
21 金の化けもの
22 赤い鯉と白い鯉
23 おかめ・ひよつとこの由来
24 河童の手
25 鵜匠の化け物
26 岩魚和尚

24 25 25 26 28 31 33 36 40 43 46 48 50

102 100 95 93 90 89 87 85 82 80 75 72 70 61 58 55 52

114 113 109 107 106 105 104

凡 例

昭和五十五年一月四日にテープにとったものを翻字したものであるが、一〇一九までは佐藤孝一氏の手書き原稿からのものである。

1 俄か長者

むかしとんあつたずま。

ある村さ、とても働き者の若い衆いだけど。ところが誰でも同じ事で、何とかしてお金、いや物持ちになつて、長者さまになつて見だつねがねいと、常々思つていただけど。

ある日、旅さ出て見たんだど。したれば、いづしか日がとつぷり暮れで、困つたなあと思つて、ふつと脇を見たら、村はずれに一軒家があつたんだど。そこさ行つて一夜の宿をたのんだれば、その家の主人が、こころよく引受けでけだど。まずは、何もなくとも夕飯ゆふめしということ、お膳が運ばれてきた。

お汁つゆからいただいて、それがら御飯ごはんという具合に行つたら、何とザリザリする。「あるじ、何でザリザリするんだ」

て聞いてみたら、

「味噌が足りないがら、少々壁土を入れたんだ」

ていった。またお汁の実がばかに固い。聞いてみたら、

「ほだなわけないんだがなあ、新藁を入れたんだがら」

なんと、馬とでも間違っているでないがど思つて、

「これこれ、あるじ、魚はないのが」

ていったら、

「あいにく切らしたから、浜き行つて買つてきてけらっしゃい」

ていわれで、買いに行くと思つたら、

「お客さん、この辺の人は足元見つから、下から付けて買つてござっしゃい」

て教えらつたど。

いよいよ浜き行つたれば、漁船が今入つたばかりだけど。鯛やらまぐろやら、いっ

ぱいあつけど。

「これこれ、この魚売つてもらいだいんだが、鯛十匹、まぐろ十匹で老銭でどうだ」

いうたれば、「はい」て言うて、「鯛十尾、まぐろ十尾で一銭お買い上げ」

て、大きな声でいうたど思つたら、

「その他、小鯨一匹、おまけして」

ていつて、届けるようにして来たんだど。

ほうして大意気になつて帰つてきて、今までのことを話したら、

「なあんだ、お客さん、一銭も出したら、船ごと網ごとと、人足も、鯨など三頭もついで買うえがつたべな」

ていうて、

「この村では五両もつた人が一番の長者さまで、代々庄屋さましておいでになるが、あなたいくらぐらい持つてござる」

て聞かれだど。

「たんともないが、三拾両はある」

ていうたら、主人がぶつたまげで、おれが悪いようにしながら、この村で暮してける。一両も出さずど土地も買われるし、二両も出さずど家も建つというわけで、この村に落付くことにしたれば、今度、長者の娘もらてける、来年改選だから、庄屋様になてけるなて言わ^ゆつて、両手に花でまこ^{たい}にこの上ない、大したい事

になったもんだと思って、アハハ……。アハハ……て笑っていただれば、おくさんに夜中、

「何ねぼけでんなだ、さつきから」

ていわつで目さまして見だれば、夢だったど。どんぴんからりん、すつからりん。

2 わらみご長者

むかすむがす、あるどころに、まま母とそのたくさんの子どもと、先妻の子どもと居^ゑだけど。むかしはお産の事故でなくなることが多がつたもんだから、どの村にも、まま母ていうな居るんだけど。

ところが、その先妻の子どもが若者になつて、誰かに、お前は今の母さんの子どもでないぞ、て教えらつたんだど。

んだげんども、あだえやさしくしてくれる人、本当の母親だと思つていだんだつ

たど。

ある年の秋、取り入れもきまつたす、冬なの藁仕事ぐらいしたんでは、お汁の泡代ぐらいしかなんねていうわけで、食べらしのつもりで、出かせぎに出だんだど。ほの時、持つて行くものとて、何もなぐ、ワラミゴ一本持つて行つたんだど。

したれば、どこからともなく一匹のアブが飛んできたんだど。はえづば捕めでミゴで結えで、ずうつと行つたれば、向うの方がら馬車さのつた百姓の子ども来て、「あのアブ欲すい、あのアブ欲すい」

ていうもんだから、何気なく呉でやつたんだど。したれば熟み瓜三つ呉れんだど。はえづ持つて、その道まだずうつと行つたれば、お姫さまの道中ど行き会つたんだど。したれば、そのお姫さま、

「喉乾いだ、喉乾いだ」

ていうげんど、その付近に水らしいもの、何にもなくて、付人がほとほと困つていだんだけど。そこで、さつきもらつた熟み瓜ば、おしげもなく差し上げだんだど。したれば、今度、木綿の反物三反くれだんだど。

また、ずうつと行つたれば、馬喰だ、馬三匹引張つて来たげんど、一匹が病氣になつて立ったり転んだりして苦しんでえだけど。しまいには倒れてしまつたんだけど。ほごさ行つたれば、

「何か、かけるものなえべが」

て、可哀そうだから、何か、かけてやっだいなていうてだもんだから、反物やつたれば、

「この馬、お前さ呉つから」

ていうて行つてしまつたんだど。したればほの馬、疝痛でガスが腹にたまつて苦しんでいだなだけげんど、屁一発たつたれば、もつくりど起きで、たちまちええぐなつたけど。

その馬ひつぱつて下つて行つたれば、大きい村さ着いだけど。ほごの村さ着いだれば、村の人々が馬引つ張つた若い者来たあ、なて見っただけあ、一人の人が、
「実は、君、長者さまで働いでけねが。来年、代かきさんねくて困つて居たところだ。馬も居だことだす、何とか頼む」

ていうわけで、腰おちつけで、働いでみだれば、旦那さまと奥方さま、伊勢ま
いりに行がんなねていうことで出て行つたきり、何年経つても、帰つて来ねがっ
たど。ほこでその身上全部若者のものになつて、長者さまになつたけど。どんぴ
んからりん、すつからりん。

3 節分の鬼

むかすといふあつたけずま。

ある村に少々変つた夫婦えだけど。そのころは、何ぼ働いても働いても、なか
なか楽になんない。五年、七年に一度不作などあつたりして、大変だつたど。そ
ごで、二人が寝物語を始めだんだど。そろそろ寒もすぎ、節分（福は内、鬼は外）
て、煎り豆をまぐ日が近づいてきたが、なんぼなんでも、世の中全部福は内、鬼
は外では、特に「鬼の目ン玉ぶつつぶせ」なんて、豆まがれだんでは、鬼が可哀

そうでないが、ていうわけで、その家では節分に、福は内、鬼は外でなく、反対にして、いぐら鬼でも可哀そうだから、その日一晩泊めで、酒などふるまってやる事に話合ったんだ。

いよいよ、節分の日やって来たんだ。ほして、表さ「鬼は内」と貼紙しておいだんだ。どこさ行っても「福は内、鬼は外」鬼の目ン玉ぶつつぶせ」なて豆ぶつつけらつて休むところもない。ところが鬼どもずうつと来たらば、なんと「鬼は内、鬼は内」て聞える。

「みんな、ここで休ませてもらうべ」

入ってきたんだ。したれば田がくなど焼いで、酒まで出して接待してくれだ。鬼共喜んで、一晩中酒盛りして帰って行ったんだ。帰って行くどき、一番年寄りの鬼が、痛み止めの薬の製法を教えで行ったんだ。

「酒をもやして、炎の中がら、こうして取れよ」

て、教えて行った。それを試して見だれば、なんと腹の痛み、頭の痛み、歯の痛み、特に歯の痛みにはよく効くんだけど。

ところが、噂が噂を呼んで、売れるわ売れるわ、たちまちお金持になったんだ
けど。近郷近在は無論、はるか遠方から買いに来る。これも、鬼は内のおかげさ
まだで、いうわけで、今でもその家では節分に限って、鬼は内、福は外だけど。
どんぴんからりん、すっからりん。

4 手品^{づま}つかい

むかすむかす、上山さ天勝一行が小屋掛けで、手品^{づま}使つて見せるということに
なつて、当時、大人気があつたもんだから、近郷近在がら、わんさわんさと押し
かげだんだど。

したればやつぱり、看板にたがわず、空の箱から猫を出したり、水の中さ花咲
かせたり、雪を降らせたり、その妙技は目を見張るばかりだつたど。

ところがだんだん目録が進んで行く^えにしたがつて、みんなその氣になてしまつ

たところが、終わり頃から、俄か雨降り始めだんだど。

「東西東西、にぎにぎしくお出で下さった皆々様に、ぬれられては申訳も之無く、つきましては、粗品ではございますが、カラ傘一本ずつ進呈いたしますので、お持ち帰り下さい」

という事で、みんなカラ傘をもらつて帰つてきた。ほうしたれば、約半道ぐらい来たれば、今迄雨降りだと思つたれば、お空さ、お星様いっぱい出で、雨な一粒も降つてなくて、もらてきた傘だと思つていたのが、割箸^{くわしほ}だけど。手品使いざ、大したもんだというだけど。

5 南山の馬鹿どの

むかすむかす、あるところに、少々とんなな殿さま居^ゐだけど。大体、どこの殿さまも世間知らずで、馬鹿くさいのが通り相場であつたど。

一説によれば、あまり切れ者だと、長持ちしなかつたんだど。きらわれて毒殺されたりして……。

んだから、知っていても馬鹿なふりしている殿さまも居だけど。

時に、ある日、農家から白菜二株献上されだんだど。一方は丸々どして大きい奴と、ほっそりして小さいやつとであつたど。

「余が食して見るがら、漬けでまいれ」

食べて見だれば、なんと大きい方がうまく、細い方がまずがつたど。

「これ、三太夫、なぜ大きい方が美味で、小さい方がまずいのか」

「はい、小さい方は石灰と下肥が不足してございます」

「苦しくない、これに石灰と下肥を入れてまいれ」
というたけど。

6 巾五間長さ十間の大灯籠 ― 江戸見世物小屋 ―

田舎でも少々小金たまると、江戸見物でいうことになるなだけど。

ところが、生馬の目もぬくというぐらいで、油断のできねえもんで、特にイカサマ物が多く、気を付けんねなだけど。

「さあさあ、五間に十間の大灯籠、見なければ一生の損、末代の恥」

ていうて呼込んでだけど。そこで在郷太郎が引掛かった。何がしの木戸銭を出して入ってみたれば、なんと、巾五間、長さ十間の道路が切ってあっただけだけど。ほして前から後へ、

「通ろう、通ろう」ていうなだけど。

7 命の親玉 ― 江戸見世物小屋 ―

「東西東西、世にもまれなる命の親玉、お金はなくとも生きては行ける。これ
がなければ、生きては行けぬ。見てお帰り、孫子のために……」

幕張った中に何かがあるわけだが、ある田舎者が五、六人、入って見だら、ど
うだべ、赤いお膳にゴマヤキメシ、黒いお膳にはキナゴヤキメシがあつけど。見
物人はえづを見て、「やつぱりなあ」

8 駱らく 駝だ

むがすむがす、その江戸でチラシ見だれば、「一、瘤はけらくだ。二、瘤はけらくだ数あ
る中に、こぶなしらくだ、大駱駝、子らくだ、禿はげらくだ」という見世物あつけど。
これは珍しいと思つて、木戸銭払つて見だれば、動物らしいもの一匹えも居ねけど。

大声立でで、「らくだ、どこに居だ」て聞いて見だれば、

「お客様、ちよつと待つて下さい」ていうたと思つたれば、大きい人、小さい人、禿げた人出てきて、ごろつと横になて、「ああ、らくだ」て寝てんなだけ。なるほど、畑たがやしたり、代かきから見つずど、楽には間違いないだなあていうたけど。

9 ライオンと熊

むかしとんとんあつたずまなあ。

むかしは長子相続で次三男は、よほど旦那衆でないど養子に行つたり、分家しでもらうことは出来ながつたど。

そこで次三男はどこかで働がんなねがつたど。村の友だちが江戸さ行つて、楽に暮しているて噂があつて、みんなうらやんで居だけど。ところがある日、ひよつ

こり帰ってきて、

「誰が楽して、日当の倍の給料を出すから、行つてけねが」
ていうたんだ。ところでその人の友だちが、「大丈夫だか」ていうたれば、「おれが保障すつから」ていうわけで、江戸さ出發したわけだ。

ほして、江戸表さ着いだれば、

「さつそく、明日から仕事をしてもらうが、実はライオンの皮を着て、オリの中を歩いたり、ねだりあくびをしたりさえすつどええなだ」

突然、相棒に休まつて困つてだところなもので、ということなので、なるほどらぐだ、野良仕事よりずうつとええなあど思つて、結局、動物園のインチキライオンに扮していたわけだ。

春先の天気のええ日だけ。頼まつた若者が毎日教えらつたとおりやつて何事もなかったが、動物園の案内の人が挨拶始めだんだ。

「本日は、かくもにぎにぎしく御来園くださいまして、誠にありがとうございます。さて、只今より、呼物の熊とライオンの喧嘩をござらんに入れます。畜生のこ

ととて、どちらかが死ぬまで、なかなか勝負がつかないと思います。海の向うのライオンが勝ちますか、地元の熊の頭上に勝利の女神がほほえみますやら、とく
とごらん下さい」

ていうたんだぞ。

ほうして、居る内、熊の入ったオリが運ばれて来たんだぞ。

「只今より、獅子のオリの中に熊を入れてお目にかけます」

こういう事だったのが、あまり話がうますぎると思つた。いざというど友だち
なていうても駄目なもんだなあ、熊のオリさ入るんだら、途中で逃げることも出
来っけんど、絶体絶命だ。親熊のうなり声聞えでくる。それ！というたと思つた
ら、熊がとび込んできた。

「ナムアミダブツ」

「おい、心配すんな、おれだ」

10 温泉湯治の由来

むかしとんとんあつたずまあ。

ある山奥の村で、連がら離^{つれ}つで弱^えつて居だ小猿、捕^すめできたんだど。可哀そうだと思つて、毎日、人間と同じ食物たべさせで育て居だけど。

したれば、段々大きくなて、またその猿コがなかなか賢くくて、役に立つようになった。喋^{しゃべ}らんないばかりで、何でもわがつて居るけど。

たまたま、その家では子どもが生れて居だもんだから、子守りを上手にするようになつて居だけど。子どもも大分大きくなて、その猿になつくようになったけど。して、その猿の右手の先の方が毛変りで、白くなていだもんだから、家内中「手白、手白」て呼んでいだけど。

ある日、ちよつとしたことがら、子どもさケガさせでしまった。ほうして、家の人がら、大變^{おそろ}ごしやがつだ。したれば、手白が居ねぐなたはあ。気付いてみれば、子どもも居ねぐなた。大變な事になたはあていうわけで、村中手分けして

探すことになったんだけど。そこら近辺探したげんど見当らね。ずうっと山奥さ入って行つたれば、朝日さ当つて、もやあつとした水蒸氣が昇^えつて居だどこあつけど。そこで、なんだが、ちらちら動く物あつけど。何だべえと思つて、ほごさ行つて見だれば、何と手白が見える。よぐよぐ傍さ行つて魂消^こしたんだ。温泉が湧^わんだんだ。ほの温泉さ、怪我したところば浸^ひしては上げ、浸^ひしては上げして居^ゐだけ。よぐよぐ見だれば、傷はほとんど治^いていただけはあ。

「ああ、やつぱり、あの小猿もきつと怪我して弱^よつて居^ゐだったのでは。そしてあの毛変^けりしたところは、怪我の跡では……。親に教^おえらつだどころさ、わざわざ連^つれで行^いつて治^いしてくれだんだなあ」

て思^{おも}つたけど。

ほれがら、その村では、怪我したり、膝や頭、その他痛い時、そこのお湯さ入るど、たちまち治^いんなだけ。そしてまた疲れもとれる。

それがら、その話が全国さ広がり、温泉を見付けでは湯治するようになったなだけ。

11 海の上でも歩けそうだ — 一口話 —

右の足が沈まね内に、左の足を出す、左の足が沈まね内に、右を出せば、海の上も歩ける。

12 雨の降る孔 — 一口話 —

兄弟二人が竿で、何やら満天の星の降るような夜、お星さまこそ、あのうつとらしい。

「雨の降る孔だ、振り落せい！」

ていうわけで、竿をふり廻したれば、ほごさ親父出はて来て、

「下では、届がねがら、屋根上さあがつて、叩げ」
はた
ていうたけど。

13 餅つき——一口話——

ある人が、餅搗ぐ時、上さも臼を置くど、一時に上下で、杵きぎの上げ下げで一度に搗けるなあって、いうたけど。

14 めぐらと提灯——一口話——

ある真つ暗な夜、盲目が提灯借りに来たんだど。ほごの家の人、

「お前、盲目でも関係ないべなあ」

というたれば、

「おれは、差し支えないげんど、目明きが、つぎ当ってなんないがら」
というたけど。

15 おしとニワトリ ― 一口話 ―

のどかな春の昼さがり、ニワドリが次から次へ、「コケコッコ、コケコッコ」
て鳴いだけど。

はえづ、しげしげと見た、つんぼが、

「いやいや、日が長くなたもんだ。ニワドリ、アクビの出し続けだ」
ていうただけど。

16 塙保喜一

塙保喜一という盲の大先生いだけど。多くの弟子ども居で、日中働いで、夜手
習いするなだけど。

ある時、いつものとおり、ローソク点けで、おさらいが始まったんだど。ある

ところまで本読んだれば、一陣の風吹いできて、ローソクの灯がパツと消だんだど。

「先生、先生。ちょっと待ってけらっしゃい。灯りが消だ」
というたれば、大先生、

「さてさて、目明きという者は、誠に不自由なもんだなあ」
というたけど。

17 すりまげ

むがすむがす、大岡さまが、泥棒はいけないが、スリはよろしい。ただしすりまげという、特別の髪^{かみ}の結い方をすんなねて、いうたけど。

一般の人はみんなそのまげを見て、
「ああ、スリ来た。スリ来た」

て、貴重品、仕舞い直したもんだと。

むかしは、どこの村でも一度はお伊勢さま参りはしたいもんだなあて思つて居て、団体組んで行くなだけど。

無事、お詣りもすんで、江戸見物でもして帰るべえと思つたげんと、懷具合がみんな淋しくなつたけど。長旅で頭もボサボサになつたもんだから、床屋さ行くべえて、髪結いさ行つたんだと。

その団体さ、少々タリンスな人居^えだけど。したれば床屋では、あんまりツポカボ目^{まなぐ}して、ムゲツブみだいしているもんだから、スリマゲ結つて呉^えだんだと。しまらね口して、ほつっこつ見物して来たら、ものすごい早さで走つて来たと思つたれば、ドーンと、そのスリマゲのタリンスさ、嫌つていうほど、ぶつつかつたんだと。したけあ、袖の辺りが重だくなつたんだと。調べてみだれば、大した金だけど。本物のスリが役人に追^おわつて、逃げられなくて、同業のスリマゲ結つた奴さ入^いれで行つたなだけど。スリマゲ結つてもらつたタリンスのおかげで、みんな楽しく見物してきたけど。

18 鮭 女 房

むかしとんとんあつたずまあ。

ある村に、とつても働き者の若衆居だけど。ところが、どういうわけか、三十近くなても、一人者だったけど。

とある日のこと、用足しに町さ行ぐど思つて、途中まで行つたれば、わらし子だいっぱいして、何か、いじめっだけ。何だと思つて傍さ行つて見だれば、鮭だけど。若者がかわいいそうだと思つて、

「どうだ、おれさ売つてけろ」

ていうて、なにがしの金で買つて、大川さ放してやつたんだど。したれば、「ありがとうさま、ありがとうさま」ていうようなそぶりで、泡、ぶぐぶぐ出して、どこともなく行つてしまつたんだどはあ。

ほして、二、三日、何ごともなく過ぎだが、ある夕方、きれいな女来て、おなこ

「どうか泊めてけらっしゃい」

ていうので、よぐよぐ見だれば、どこさが行く宛もないようだす、ほの女ば泊めだんだど。

次の朝、早く起きで、掃除、洗濯、針仕事、外に料理、まず小ママに働ぐごと、働ぐごと。明るくなてがら、しげしげと眺めで見だれば、なんと羨しいこと、美しいごと、まるで天人か乙姫さまみだえだけど。

ほして、ほの女がいうたんだど。

「ふつつか者^{もん}だげんど、なんとか私ば、あなたのお嫁さんにしてもらわねべか」
若者は文句があるはずがながったど。

ほして、二人が一緒になて、仲よく暮したれば、ほのお嫁さんが、

「お願いだから、私のねがい二つ、聞いてけらっしゃい。一つは、水車のかげの川原さ田起すべえ。今まで一人だったげんど、こんど二人だから、ほれがら今一つは、私が夜仕事したところ見ねでもらいだい」

ていうたど。

ほうしている内、夜になつずど、納屋で仕事する音するんだど。「シヤリシヤリ、

シヤリシヤリ」て、えんえんと続くんだど。若者が見んて言っだもんだから、かえって見だえのは人情なもんで、雨降る晩に、そおつとのぞいだんだど。したれば、縄ないしつたんだけど。

「あら、鮭だ」

ていうてしまったんだど。したれば、その鮭女房が、

「見ねでけろて頼んだに、みにくい正体見らつてしまては、ここに居るわけがねっだなはあ。何をかくそう、私は、あの時、あなたに助けらつた鮭だった。何とかお礼しなくて、人間になて来たげんと、正体見らつては、もうおさらばだなあ」

ていうわけで、縄ば持て、行つてしまったんだどはあ。

次の日、まさか、水車のかげなて言うたけがら、ほごさ行つて見だれば、なんと川原さ広々とした石ごろのところさ、なつた縄ば張つてだんだけど。昔は川端の広場は官地で持主もながったもんで、特に石ごろの所なの見向きもしながった。なして、こだんどころさ、縄なの張ったべえて、不思議しつたれば、二、三日し

たら、大雨降ってきて、その縄はったところさ、泥土いっぱい溜まって、立派な水田になったんだとはあ。約五反歩ばり起きだんだど。

やっぱり、魚だがら、何時、水出て、土、どこさ寄るがわかるなだったべなあって、いうたけど。どんぴんからりん、すっからりん。

19 ガニ滝とウナギ滝

むがす、刈田領というところに不動滝というところがあったずまあ。

その滝をのぼった者は、その辺の主になるって言われたど。

むかし、中国の黄河の上流に龍門というところがあつて、特に急流で、百魚、それを昇り得ず、もし昇れば龍となつて天上するといふ謂れがあつた。

ところで、刈田の不動滝も中国の竜門と同じで、その下まで辿りついたのは「ガニ」どその「ウナギ」だったど。

いつしか、ウナギとガニが覇を競うようになった。そこには「ガニ滝」「ウナギ滝」ができていただけ。

ある晩、きれいな女が炭焼き夫婦のところへ、「こんばんは」てきて、

「実はいま、私、ガニにおそわれて、鋏で切られようとしている。何とか、あなたの斧で、ガニの甲羅をぶつ割っていただきたい」

大変いそいでいるようだけ。ところが、あまりきれいでなんだか、地元の娘でなく、都の女みただけ。ところが、そこのおかたが、あんまりきれいな女来たので、親父とられると悪れど思つて、ヤキモチ焼いで、親父ばおさえて、その晩放さねがった。

次の日に、気にかがって、滝のところさ行つて見れば、すでにウナギが、ガニにはさまれて、胴切されて居だけどはあ。

「ああ、やつぱり、昨日のうちに助けてやれば、何とかなつたのになあ。ここまで来て、ウナギも不動滝さのぼせでやつたのがったなあ」
ていうたけ。

20 ナマハゲの由来

むがすむがす、漢の武帝という王さまが、東洋ジーペンの国に、不老長寿の薬がある、それを求めたいというので、五匹のコウモリに命じて、舟で日本さ旅立たせたわけだ。

ところが玄海灘まで来たら、ものすごい、船が、荒れて荒れ狂ったためにその五匹のコウモリが鬼になってしまふわけだ。ほして着いだところが、丁度秋田の男鹿というところに着いだ。ほしてそれがこんどは山さ入って行つて、途中に相当困難してきたもんだから、気が荒れずさんで、そして悪いごどいっそうやつた。女、子どもはかつつあらう、ひつたぐり、野荒しはする、まずひどい目にあつたど。

ところが、人間ていうものは智恵があつた。んで、そういう鬼が来ないように、ていうわけで、この辺でいうドンブラコ（ろくさい落し穴）ていうの掘って、その中さ竹槍なの入ったり、あるいは鹿砦ろくさいて称して、鹿の角みたいに鋭つたもので、農作物

を守ったり何かした。それで鬼共もほうほうの態だった。しかしながら、処々方々で鬼の被害が相当でておった。

いろいろ占師さ行つて聞いたり何かしてみたれば、

「これは、鬼と賭けする以外にないんだ」

「その賭けていうな、どういう風にしてするか」

ていうたら、

「天神さまさ千段の石垣を一夜のうちに積んでもらいたい。これが出来たら、鬼の、し放題でええ、自由自在でええ、ほのかわり、それができなかったならば、一切、人間のものに手を触れでもらつては困る。これは鬼と人間の固い一つの賭けである」

こういう風にして、鬼と賭け合つて、「よろしい」と、こういう風になった。ほして、今度あ、いよいよその晩になったら、何と鬼共は、ほれ、自由にしたい、盗りだいのものを盗りだいもんだから、どつから集めて来たか分んねげんど、その地方には非常に石が少ない地方だったそうだけでも、いつの間にすばらしい大き

い石ばり持つてきて、鬼がピタピタ、ピタピタ並べて、もう八百段もなつてしまつた。まだまだ夜が明けぬ。

「困つたごどえなつたもんだ、こりや」

ど思つて考えていたらば、

「ああ、ほだ。天邪鬼さおねがいすんなね」

て、こういうわけで、天邪鬼さ頼んで、夜明けだということ、一番鶏の鶏の鳴き声してもらつた。ほして、へコケコツコーで鳴いだ。そら、まもなくまた、へコケコツコーで、二番鶏鳴いだ。

「三番鶏鳴けば、夜明けだ」

こういう風に、昔の人いうたもんだから、二番鶏、三番鶏も高らかに鳴つたらば、鬼共は、「負けだ！」というわけではあ、どんどん、どんどん、そこから逃げ行つてしまつた。ほしてはあ、姿現わすごどないがつたはあて。

ちやうど、男鹿地方の人だ、「いや、鬼は悪れごどもしたげんど、かわいいごどもあつた」ど。

とにかく、正月の十五日だけ、その鬼を忍んで、鬼の格好して、なまけものをいましめようと、出はった。その行事だな、はいつ、なして〈ナマハゲ〉ていうたがていうど、昔、鬼のことを〈オニ〉て言わねがった。「ナマハギ」ていうた。なぜつて言うど、ムジナでも兎でも鹿でも、何でもみな「生で剥^はいで食う」から〈ナマハギ〉ていうたど。「ナマハギ」ていうたのが訛つて、〈ナマハゲ〉ていうようになった。どんぴんからりん、すっからりん。

21 金の化けもの

あるところに、とっても恐がり屋がいだった。さびしがり屋だねえ。

「かあちゃ、かあちゃ、我慢さんね。また、したぐなった」

「なんだべ、お前、今したばりで、またしたぐなったなて、お前ていう人は」

夜一人でオシッコしに起きらんねがった。かあちゃんが付いて行つて呉んなね

がった、さびしくて。

ほしてある時、夜おそくなつどさびしいもんだから、友だちと一緒に用足しに行つて帰つてきた。んだげんども、友だちと一緒に家さ入るわけに行かね。途中から別つた。別つたら、何と、道傍さ、ほら、ぶらつと下がった幽霊がら、脇から、ふさふさとした手出して、ほの、かかる幽霊から、いろいろな幽霊、ほして途中まで来たれば、「シュー」ていうたど。

首が、切らつたなど思つて、ちよつと手、当ててみたれば、血だつたて。

「やつ、やらつた」

ていうわけで、家さ来て、

「かあちゃん、やらつた、首切らつた」

ていうわけで来た。

「何、また、あんた、あわで、どれどれ見せてみる。どこさ血なの流つてだよ」

「ほら、血出つた」

見たれば、それは紅葉の木から、しずくが落つて、ほして紅葉の葉っぱ、ふつ

ついでおったど。赤いもんだから、ほれ、血と間違っていたて。

「ええが、あんた。世の中には恐いものなてないんだ。わたしと一緒に行ってみろ」

というわけで、ほれ、行ってみた。

ぶらぶら下がつて幽霊だと思ったのが、ヒョウタンだのへちマだのだった。さつさと出て来た幽霊は枯尾花、いわゆるカヤどか葭よしの穂だったて。しずくがピタツと来たのは、切らつたように感じたのだつて。

「恐いものなて、ないんだ。お前、ほの心持ちがそういう風だから、みなそういう風に見えんだ。ええが」

「分わがた。かあちゃん、分がた。今度分がた。恐いものないの、わがた」

少し足んねえ者は、これあ、信じたというど、こだえ恐ろしいものはないもんだ。ある時、庄屋さんさ招ばつで行つた。ほして、

「おれあ、んでも、夜、どちがていうど恐がりの方だから、早く帰んべはあ」
ていうて、帰つて来た。ある丘まで来たら、本当に、おかしな幽霊みたいな出

た。そしたら、その少し足りない男あ、かあちゃんに、恐いものない、絶対ないで教えらったもんだから、平然としていた。ところが、一緒に行った友だちの方が伸びてしまった。

「いや、出た！」というわけで、伸びてしまったはあ。誰に言うどなぐ、ほこば昔から、「幽霊が丘」だの「化けものが丘」だていうところだった。たまたま出ることがあつたて言うんだな。そうすつど、

「よし、恐いものの、ないんだぞ」

というわけで、こんどは、へかあちゃんに、おれは聞いたから、絶対恐いものないんだ。というわけで、ほの幽霊さ、そのさびしがり屋の若者が、どんどん、どんどん追い掛けて行ったらば、そうすつど野越え、山越え、どこさ行ぐど思ったら、沼みたいなどこさ入って行つた。入って行つたてわかるもんか、とつつかまえてくれるというわけで、入って行つて、つかんでみた。つかんでみて、はいつ上げてみたれば、大きい瓶だったというんだな。

んで、その瓶開けてみたれば、何とそこさ大判、小判がざくざく入っていった

て。んだがらそのお金が娑婆さ出はったくて、幽霊になって、たまたま出はった
なが、そういうわけで、その人に見つかったんだて。どんぴんからりん、すっか
らりん。

22 赤い鯉と白い鯉

むがすむがす、この地方さ、ほつつがら殿さま来たり、こつつがらも殿さま来
たり、いろいろ戦国時代に、殿さま来て、必ずしも善政を敷いた殿さまばかりでな
かった。

ここにも櫓下城という城があり、三上には鶴巻城、ほら、あの松山城ていうて
ちよつとここらだけ数えただけで、三つも四つも城主が居だった。

ところが、ある城主が非常に性悪^{たっわ}れ、性悪ればっかりでなくて、助平でヒヒジ
じいみたいなもので、ええ女さえいっど、すぐ、

「上げる。上げねど手打ちにする、一家断絶」

こういうこと言うもんだけど。

この村に器量のええ二人娘がおったど。その十八になる姉の方を、是非城中に上げる。家の人が困ってしまった。

ほしたら、その娘が、「わたしには好きな人がいたんだげんど、城中さ上がるぐらいだらば……」て、袖、たもとさいっぱい石入れて、川さ入って死んでしまつたど。妹も同情して、その川さ入って死んでしまつたわけよ。そうすつど、いつからともなく、その川に目の下五尺もあるような赤い鯉と白い鯉が泳ぐようになった。ほして、はいつ雑魚釣りなんか、鱒つきに行ったりなんかした人が、その鯉見ると、なんか、ゾクゾクと寒くなって、熱っぽくなって、熱出して寝込むようになる。

て、ある時、上山の殿さまが雑魚釣りに来た。何だかその日に限って一匹も釣れないげんども、次から次と大鯉が追っかけて登ってくる。そしてその二匹の鯉が、よりそつて、尾っぱ振れ合ったりなんかして、仲よさそうにしてる。

「いや、ここでは鱒もクキも何も釣れねがら……」

て、次の上の渚さ行つて釣つてみつど、またその鯉が追っかけてくる。

「たしかにこれは、何かあるでないか」

というわけで、その若殿さまが、その部落でいろいろ聞いた。そしたら、今を去ること何年前に、こうこう、こういうごとあつたて……。

「ああ、そうが。前にいた殿さま、非常にええぐないていうことは聞いたげんども、そういうことあつたが。そんではきつと、亡霊も浮かばんねくて、その鯉になつて、何とか成仏したくて、人間に訴えてゐるんだらう」

こういうわけで、上山三十八ヶ寺、お寺さまみな集めて、大々的に供養したんだ。ほうしたれば、二匹の鯉が昇天して行くのを見たていう人もゐるし、見えながつたていう人もいっけんども、その供養してから、二匹の赤鯉と白鯉がいねぐなつたつたてだ。どんぴんからりん、すっからりん。

23 おかめ・ひよつとこの由来

むがすむがす、あるところに、下ぶくれしものぽちやつとした娘がいて、これはまた働くごどつたら、まず他の娘とちがつて、一生懸命、身を粉にして働く娘이었다。

「いや、ええ娘だ」

ところが、ほれ、下ぶくれで、あんまり器量にめぐまんねもんだつたがら、縁が遠がった。

ところがある時、朝げ、水汲みに行ったら、釣瓶の中さ小判が一枚入っておつた。次の日もまた小判が入っていだ。

「うえつ、不思議なこともあるもんだ」

ど思っているうちに、水汲むべと思つたら、釣瓶の方重だくなつてはあ、ほして、逆に上げらつてしまつて、ポチャンと井戸の中さ入つて行つた。井戸中さ入つてみて、たまげた。世の中の裏側なんだけど。ほこが。

ほして、迎えに来たのは、恵比須さま、大黒さま。ずうっとその人と行つてみれば、一家が七福神なんだけど。恵比寿、大黒、ほてい、福禄、毘沙門天、寿老人、弁財天と、全部七福神さまいだつて。ほして、

「実は、いま非常にいそがしい時だから、手伝つてける」

というわけで、請われるまま、ほの娘が一生懸命手伝つた。ほしてある時、
「いや、この井戸の中ていうものは、世の中の裏街道なんだ。裏なんだ。ほご見つど、よつく世の中わがつかから、お前がこれから地上さ歸つて行つて、表さ歸つて行つて、もしわからねごとあつたら、ちよいちよいこの井戸の中さ入つてみる。んだと、世の中の裏側みな見えつから」

こういうわけだ。ほして、井戸の中さ入つて行つてみることを聞いて、井戸から何がしのお札をもらつて歸つてきた。ほうしたら、地上では、

「ほら、娘、居ね。なぜしたべ。おかめ居ね。おかめ居ね」

て、探したと。ほしたら井戸の中から出はつてきた。

「ああ、ええがった、ええがった」

て、ほして、井戸の中から、すばらしく御褒美もらて来たもんだから、何だか娘さ福がついてるらしくい、いうわけで、あるすばらしく大きいどこから、声が掛った。ほしてほこさ頼まつで行った。したら、やっぱり裏側の、先の先まで見えるもんだから、ほこでも、たちまち、もでで、すばらしく、ほごの家も福しぐなつた。

ほしたら、はいづ殿さまの耳に入つて、殿さまも、

「ほんじゃ、おら方さ貸してけろ」

ていうわけで、ほこでは、ある程度福しくなつたから貸してやった。ほうしたら、その殿さまも、すばらしく、米相場だ何だていうので当つた。やっぱり、ほれ、殿さまたりといえども、一錢だて金ていうな無くて、祿高という米で貰うもんだから、売らなければ一文にもならなかつたど。売るためには札差ていうな居で、売つて采配ふつて、ほして数多武将さ、あまたまず金を呉れたりするのは、まず米を売らなければならながつたど。ほの売り買いなんかは、裏の裏まで分かるもんだから、先の先まで分かるもんだから、大変貴重だつたて。

ほして、そこに長年仕えっだ若衆と一緒になるわけだね。ほの若衆というなは、いわゆる若いときから、風呂焚いだり、御飯炊いだり、何かえしていて、口が少し曲っていただていうんだな。んだげんども、ほれ、二人は一緒になって、樂々暮したど。んで、片脇がおかめであり、片脇が火男だつたていうわけで、おかめとひよつとこが一緒になつたていうわけで、おかめ・ひよつとこの話。どんぴんからりん、すつからりん。

24 河童の手

むがすむがす、奎庵先生て、今でいえば内科の明るい先生がおつたつて。んだげんども、外科の方はあまり得手前えてまえでなかつたらしい。

ところが、たまたま、ある橋端まで、患者のどこに行つて歸つてきたところが、何だか板さ馬の足、吸い着いたみたいになつて、ピタリと馬が止つてしまった。

何だろうと思つて、こう、夜陰に乗じて、こう、下の方見てみれば、何と小さな怪物が、馬の足さまつわりつிட்ட。

「ははあ、これだな。河童という奴は」

て、腰のものを抜いで、えつと切りつけたらば、バラリとそこさ河童の手が落つたわけだ。はいつを拾つて、ゆうゆうと歸つて来た。ほしたればほれ、馬の足も動くようになって、家さ歸つて来たら、トントン、トントンで、夜、戸叩く。何ごとならんと思つて、ほれ、いたれば、さっきの河童が涙ながらに、

「手を返して下さい。時間が過ぎればはあ、手が見つからないように、ふつがねようになるんだつて。んだから、何とかお願いします。これからいたずら決してしねがら、何とか返して下さい」

ていうわけで、懇願するわけだ。そうすつど、さすがは奎庵先生、やっぱり内科とは言えども医者なわけだ。

「どうだ。お前。この手持つて行つて、何するつもりだ」
ていうたらば、

「薬をつけて、ふつつげつど、ふつつがる」

ていうた。

「んだらば、この手を返してやつから、その薬の製法教える」

ていうたつて。で、河童、手もらいたいもんだから、承諾して、そこで薬の製法を奎庵先生さ教えたど。ほしてこんど、その薬をもつて外科やったところが、なんと大概な剣はみな、たちまちにして治つてしまう。いや、すばらしいもんだというわけで、内科、外科とも有名な医者になったたはあ。どんぴんからりん、すっからりん。

25 鵜匠の化け物

むかしあるところに、古寺があつた。そこさ夜な夜な幽霊が出る。

あんまり恐いもんだから、ほこは久しく無住になつてだ。んで、そこさ旅のお

坊さんが来て、まず、その村に来て、一夜の宿を請うたら、こういうところに無住のお寺があるということを教えた。

「んじや、そこさ泊ろうかな」

ということ、そこさ泊ったれば、やっぱり、ほの幽霊が出た。

「はあ、話のとおり、ゆうれいが出たな」

て、ほの幽霊さお経となえながら追っかけて行ってみたれば、ずうつとどこへ行くべと思ったら、川原さ行った。

「はあ、ここで消えでしまった」

ていうわけで、ほしてほのお坊さんが村人に、

「この川原に、何か殺生があつたとか何とか、ないがったが」

ていうたらば、ずうつと昔、鵜匠が仲間とのいさかいで、ここで騙し討ちさつで、逝くなつたんだ。んだからきつと浮かばれなくているんだべというわけで、

「ああ、そうか」

ていうわけで、大々的にお経あげて供養してやった。で、それからはその古

寺さ化けものは出ねがったど。どんぴんからりん、すっからりん。

26 岩魚和尚い わ な お し ょ う

むかすむかす、この辺で雑魚せ獲めるために、毒もみていうなした。

毒もみていうな、何でやったがていうど、カラカもむと称して、山椒の皮をはいで、煮つめて、ほれを灰にしもわせで、それを一生懸命もずぐったわけだね。

はいつ若者だ集まって、毒もみすんべていうて、相談になった。まずはあ、山椒の木もいっぱい伐ってきて、ほして煮はだったら、ほこさお坊さんが来た。

「もしもし、あんた方だ、毒もむなだか。はいっだけは止めくだで下い」

「なしてだ」

「いや、釣ったり、網でとったりすんのは、かまわない。お互いに生きんなねのだから、それはええげんども、毒もんでしまえば、魚族が絶える。結局あんた方

も命とりになるんでないが。それだけはやめてもらいたい」

て、お坊さんが、こんこんとしてそう諭したわけだど。

ところが若者はほだなこと、まず聞き入れないで、

「なあに、構うことない。あそこにはすばらしい大きな岩魚いるという話だ。やってみろ」

ていうわけで、聞き入れないで、上さ行つて毒もみした。ところがグランと引つくりがえつて浮きた岩魚が目の下六尺もあつた。何かそれが、ほの、昨日来たお坊さんの格好によく似た、斑点が出て、衣でも着てるような白いどこと黒いどこ出たりしてな。ほして、

「ああ、ゆうべ、わたしらを止めに来たな、あの坊さんに化けて来たな、岩魚のせいだ。こりやいかん」

ていうわけで、ほれから毒もみすることを、みんな止めること申し合せだつたど。結局、大岩魚が毒もみやめらせることに成功したど。今でも魚族が絶えねでいるのが、ほのおかげだど。どんぴんからりん、すっからりん。

27 天神さまの小判

むかすむかす、ある村に天神さまがあつた。その天神さま、みんな「御利益ある」て、お詣りする天神さまだつた。

ところが、ある一人の人が、まず縁日であろうが、一日、十五日、かかさずお詣りする。一人の人あ、

「おい、君、縁日だ、今日行がねが」
ていうど、

「今日は忙しいから、君、たのむあい」
また次の時、^{がえり}

「君、んじやてまず、お詣りばりもしたらええがんべ」
ていうど、

「おれあ、まず、やっとやっと暮していらんね。何とかまず君さ頼むがら、かえづ、持って行つて供^あげてけれ」

なて、頼んでよ。ほしてほの人は、天神さま言うたど。

「この野郎、うまくない野郎だ。おれさそったつて、一ぺんも来たことない。あの野郎さ、何かやるものないもんだか、天神さま」

ていうたつて。したら天神さま、

「そうか、そうか。んだらば、これ、ほこの家の戸あけて投げで行つてけろ」

「うわっ！」

て、たまげだつて、生首だつけど。たまげだげんど、小気味ええわけだどほれ。

生首置いてつておどろかすな。

「はいはい、まちがいなく置いていきます」

て、戸開けていきなり、生首放り込んで行つた。

ほして、次の日、きやあきやあてさわいで、何た騒なんぎしつたべと思つて、こつ

そりこつそり行つて、サマ舐めで孔あけて見たれば、家内中、「アハハ、アハハ、

ええがった、ええがった」ている。なんだと思つたれば、生首だと思つたのは、

はいつ皆小判だつたど。

ほうして、ヤキモチ焼いで、ほれ、一生懸命お詣りする人あ、天神さまさ行つた。

「天神さま、天神さま、なんだず。生首なて言つたけあ、お金呉^けだんだどほりや」
「んだ」

「なしてだ。んだら、おれさ、まだまだええもの呉んなねなあ。おれなの、こ
だえ毎日、縁日というど、お詣りに来るどれ」

というたつて。ほしたら、天神さま、

「ほうか、んだげんどな。おれはお前とちがうぞ。お前は形ばかりだ。形の上
だけきれいで、形の上だけええげんども、あつちの人はそういうもんでない。本
当え誠意のある人だ。お堂建てつどきも、ないどつから銭、ほとんど出して呉^けだ。
ほして貧乏してつから来らんねな、おれも認めている。当り前だ。ほんでさえも、
お前さ届けてよこすな、お前の何層倍のお賽銭でないか。お前、お堂の建て代え
の時、何一つした、小便たつで行つたきりでないか。ほんな人とあいつと、天神
さまは一緒に出来ないんだ。誠意のある人は誠意のあるようにええことあるんだ。

お前も形ばかりを改めで、本当に誠意をつくして世の中渡れよ」

どんぴんからりん、すっからりん。

28 ムケノツイタチ

むがすむがす、ある百姓が、ふっと山芋かごったの見だれば、山芋からひよろひよろと芽出っただけはあ。

「こりや、芽出っだこりや。かかさ、降ろさせて、トロロでも食んなねっだなはあ、こりや」

ていうわけで、かがさ、

「トロロ芋、おろしておけ」

ていうて、山さ稼ぎ行つた。そのころはやっぱりこの辺も鬼がバラバラいで、まずええぐないことばかりして困っていた。農作物は荒すやら、ほら、女はた

ぶらかす、ひっかつぐ。ほら、子どもからひったぐる。まず困っていた時代だった。ほして、ほこのかあちゃん、金オロシで山芋ばゴシゴシおろした。はい、何か今日あたり、鬼のこんだから、

「今日は一日なはずだ。何か百姓だ、うまいことしてきづがんべ」

というわけで、サマからそつとのぞいてみた。のぞいて見たれば、ほの、楽しそうにソリソリ、ソリソリとおろしている。

「ありや、何だ。ははあ、わがった。鬼の角だ」

というわけで、帰って行って、先の方ぶつ欠いでおろしてみたら、何とおろされるものでない。ほん時、はつと、こう驚いだ。鬼が。

「ひよつとすると、ひよつとすると、あれはきつと、鬼のオチンチンだ」

そしてオチンチンであるまいかと思つて、また来てのぞいて見たれば、いとも楽しそうに二人は、御飯にかけて食べていた。

「はあ、これはまず、人間共というな、ゆだんさんね、鬼をぶつ倒してあの丈夫な虎の皮の褌を引っさいで、あそこをとつて来て、金オロシさかけるんでがらざあ、

とてもじゃないげんども、ここには居らんね」

というわけで、鬼共は退散して行つた。

「あそこなんか取られつど、鬼の攪乱というて、攪乱起して、たちまちにして死んでしまわんなね、困つたことだ」

というわけで、鬼共は全部ここから引き上げて行つた。ほして、はいつがほれ、ほこの村の人さ、鬼いねぐなつたことわかつた。何が原因だべつたらば、その原因が分つた。ちようどその時がムケノツイタチだつた。んだがら、ムケノツイタチには、今でもトロロおろして食う習慣が残つていんのは、鬼よけだつて。どんぴんからりん、すっからりん。

29 弘 法 水

むかしとんとんあつたずま。

あるところに働きな嫁さまいだった。ほこは、どこの村も同じだげんども、そう余裕のあつどこなくて、みんな一生懸命働かなねがつたて。その嫁さんも一生懸命毎日機織りしつた。

昔は「一丁前」ていうなあつて、一人前どこのぐらいさんなねていう仕事量あつた。たとえばウスビキ、ツマゴ仕掛けで五足。素ワラジだったら十足。ゾウリ十足。ハケゴは大きいのは一人半。小さいのは一日。^{ひして}ミノは三日。どかて、ワラ仕事でも田でも一日どのぐらい耕^{うな}えええどかていう「一丁前」ていうのあるわけだど。それ、しねうちは「夜上り」さんないどかて。んだから、なるべく時間がおいしいわけだ。

そこさ、みすぼらしい乞食坊主が来て、

「奥さん、奥さん、水、ごちそうしてけらっしゃい」

ところが、水汲みに行くには、村はずれまで行かんね。やりぐり遠いところまで行かんね。「はい」というたけあ、その嫁さんが手桶たが持つてその水汲みに行つてきた。そして御馳走した。と、その坊さん、またもどつてきて、

「何とか、大変うまい水だったから、この水でお茶出して御馳走して呉けねが」

ほしたらこんど、その嫁さんが、「はい」て、にこにこで、悪れ顔一つしねで、機台しから降つで、ほして、火、ふうふうて吹いで、燠残しったなき、木くべて、ほして、お湯わかして、お茶出して飲ませた。ほして行つたと思つたれば、

「ああ、あの水で炊いだ御飯が所望だ」

というわけで、こんどあ、御飯まで、御飯ていえばお膳あさつけるお汁から漬物からみな出して御馳走した。ほうしたら、そのお坊さま、

「ああ、お前みたいな人いね。処々方々歩たげんど、まず、おれみたいな着物きて行けば、嫌な目でみられる。ほれから水御馳走してけらっしやいなて言え、水ぐらいは御馳走する人いっけんども、お茶出して御飯まで気持よく御馳走してくれる人なて、ながった」

「おれも、こうして出家して歩ぐげんども、そう長くもないと思う。何か所望するものないか」

というわけだ。そうすつど、

「家では、米もなんぼか作ってるし、何とか、かんとか暮していつから、別に欲しいものなて、ない」

て、何一つ欲しがらねがったど。んだげんども、

「こっちの奥さん、水汲んできてけろていうたら、大変時間かかったがら、水あつどこ遠い、んねが」

ていうたら、

「いやあ、水だけ遠いのよ。水だけは何年に一度旱魃あつてひどいんだ」
ていうたつて。

「そうか、んだらば、この杖置いて行ぐがら、この杖さしたどこさは、どこさでも水出る。そして一粒だと思つても、この水をもつて行つて、田に置けば、田いっぱいになつから。それから熱出たりしても、この杖さして出たどこの水飲ませつ

ど、たちまち熱が下がり、腹痛たが治る。そしてこの水を飲めば、家内中で一人飲むど家内中が丈夫になり、一軒の家の人が飲めば、村中が丈夫になるのが、この水だ」

ていうわけで、誰言うことなく、その水のことを「弘法水」というようになった。どんぴんからりん、すっからりん。

30 手なし娘

むがすむがす、あるところに、何の変てつもない親子がいた。して、親子たのしく暮していただげども、何か、おかちゃん、ふとした風邪がもとで逝くなつてしまった。――昔は風邪ばかりでなくて、お産の事故ていうの非常に多いもんだから、まゝ母ていうな処々方々にいた。

おとうさんも若いがつたから、後家で暮すわけにも行かねもんだから、継母も

らった。

ところが、そのまま母が、娘ど、ほだえ年令も違わね。ほしてきれいな娘なもんだから、何となく邪魔になって邪魔になって、目の上のこぶみだいで、小姑みだいで、邪魔になって仕様がながつた。

で、おとうさんが用足しに行つて、二、三日留守になつて見はからつて、娘さ、

「おれ、実はあそこの草むらさ櫛落した。何とか一生けんめい、おれも探したげんども、探さんねがら、お前探してきてけろ」

ていうた。ほこさ行つてみれば短くて厚い草もさもさと生えておつた。目などで見^めけらんね。いついつ手で分けて見ねどわからがつた。行つてみだれば、その継母が、まず何十匹どなく、mamshi、ほこさ放した。ほしてはつと氣付いでみだら、右も左もmamshiに噛みづがつて、ほして苦しんでだ。ところがオタメゴカシに、

「あんた、mamshiに食つつがつだんでは、命助かつたいか、両方なの食つつがつだな、そのままにしておくど、お前死ぬんだぞはあ。助かつたいごんだら、手切

らんなねんだ」

て、間もなく手切り落として呉だ。んで、世間体もあるもんだから、傷治るまでは一生けんめい扱った。ところが傷治ったれば、様相一変してはあ、

「お前みたいな片端者」

片端者で、ののしらつでなもんだから、何とも仕様なくてはあ、ほの娘はほこ出て行くわけだねはあ。

ほしてずうつと出てはあ、歩いて行っただけでも喉は乾くし、腹はへってくる、困ったもんだ。「何かないかなあ」と思ったら、熟柿が二、三個ぶら下がっておった。で、ほこさ行つて、熟柿食うべと思つても、手ないもんだから、風でほつちや行ったり、こつちや行ったりするもんだから、なかなか食んねくていたれば、若侍がほこ通つて、

「これこれ、何してるか」「お許し下さい、実はこうこう、こういうわけで……」
ていうたれば、

「何だ、そんな柿の一つ二つどうということない。食べなさい。わたし取つてや

るから」

ていうわけで、して、

「そういうことだったら、家にまいりましょう」

て、親切な若侍が家さ連^せで行った。顔見だら何と器量ええもんだ。ほして家で扱っているうち、おとうさん、おかあさんの許可を得て、娘も氣立てええがったもんだから、その嫁になったわけだ。いつしか嫁さんが懷妊して、ほして産み月近ぐなつたわけだ。

ところが若侍が參勤交代で旅さ出んなねぐなつたわけだ。ほして旅さ出た。その間、おぼこ産しするわけだ。何とかかわいい桃太郎みだいな子ども生まつたつて。

して、父親と母親が、ほんでは、せがれの意見も聞がんなねべていうわけで、何て名前つけだらええがんと、こうこう、こういうわけで玉のような桃太郎のようなかわいい男の子生まつだんだげんども、お前の意見を聞きたいという手紙がある人に託してやった。

その人がずうっと真すぐ行けばええがったげんども、途中でいかがわしい宿さ

泊った。

娘は出してやったのをわがって、こっちでは、まま母は離縁したけど。

「お前、手もいだよな娘は出してやるような可哀そうな娘は出してやるようなは、家さ置かんね」

て、離縁するわけだ。そうすつど、離縁さつだもんだから、仕方なくて、身を半女郎屋みたいなどこさ落すわけだ。そこにいたら、手紙頼まっだ人が来て、泊つて女を買ったわけだべ。して、その女がふところさ手入つて、ねむってから、あれしてみたら、手紙が入つておつた。見たらどうやら、自分が追い出した娘の手紙らしい。見たら、玉のような男の子……。

「なんだ、結婚しておつたが、玉のような子ども産したなて、にくらしい。何と名前つけだらええべ」なていうの、取つて、ふつちやいですまつて、こういう風に書きかえだ。

「生れた子どもが、鬼だか蛇だかわかんない。占師に聞いてみたらば、大きくなつたらお前の命もとるし、家内中をみな殺しにしかねない子どもになつから、早速、

処置しなさい

こういう風に書き換えだ。ほして手紙やった。はいつ開いて見ただけあ、

「何だ、鬼だか蛇だかわかんね。すぐ離縁しろなて、ほだなむごいことあつたもんでない、何かの間違いでないが」

と疑ったげんども、めんめんと、そういう風に綴ってあつから、何とも仕様ない。

へんでも、とにかく、理由のいかんを問わず、何がどうあろうと、わたしが帰るまではそのままにしておいていただきたい

こういう風な手紙を持たせて帰したど。

したらまた、この前具合ええがったがして、その宿さ泊るわけだ。そしてふところさ手入つでみたれば、何と、「鬼でも蛇でもおいておけ」という文句だ。

はいつ、またすり換えて、

〈即刻、離縁して、出してやらないと、家内中を皆殺すおそれあるていう占いが出たから、すぐ離縁しなさい〉

という風に書き直してやるわけだ。そうすつど、それを見たおとうさんとおかあさんが、非常に歎いだ。んだげんども、これは何とも仕様ないいうて、泣きの涙で、まず別つで、結局追い出されるわけだ。

「何てむごいこと、あの人なて、あだえやさしいと思つたのに、ほだな人だべが」
て、こういう風に思いながら、まず仕方ないいうて、両方の手なくて、子どもおんぶして、ずうつとさすらいの旅続けてきたわけだ。

ところが、川辺に小さなお観音さまが立つておつた。して、そのお観音さまにお詣りでもして行こうかと思つて、お詣りすつど思つてだれば、肩からするつと子ども抜けで、川さ流れそうになつた。はつと思つたとき、両手が出て、ほして子どもを支えることができた。ほして、お観音さま言うには、

「こつからずうつと行ぐど、こういう所あつから、そこで茶店を出しなさい。ほしてお観音さまのお賽銭、これを元手に持つて行きなさい。もうがったら返しなさいよ」

こういうわけで、お観音さまからお賽銭を借用して行つて、小さな村はずれさ、

茶店を出して細々ながら暮してる。

星移り月變つて、杳として三年も過ぎてしまった。ほして旦那さんが参勤交代から帰つて家さ来てみたらば、何と話が丸つとちがう。

「玉のような、桃太郎のような子どもが出たな、何でお前、鬼子だの蛇子だのていうて、離縁させる」

「おれは、そんなことない。家から来た手紙はこうこうだけげんども、何はともあれ、わたしが帰るまで、そのままにしてでくれというごど書いたんだ」

と、話が行きちがつた。

「んだらば、どこですれちがつた」

というわけで、手紙を持つてやった人ば呼んできて、

「お前、變つたことないがつたが」

ていうたれば、

「ははあ、そう言えば、まことに申し訳ないげんども、おれはあるどころで一泊したとき、何かおかしいことがあつた」

それではということで調べてみたれば、そのまま母であつたと。「ああ、そうか」
というわけで、家の方では分つたわけだ。その誤解がとけたわけだ。即刻、まず、
手なくて非常に苦勞してるだろう。一刻も早く家に連れ戻せというわけで、人を
頼んで処々方々探しても、なかなか見つからなかつたんだなあ。ほしてある所ま
でその若侍が行ったら、コマ廻して遊んでだ子どもがあつた。何となく母親に似
てるもんだから、声かけたら、顔見ただけあ、ガラガラど、家の中さ入って行つ
てしまつた。ほして、頑なに戸を閉めではあ、戸を叩けども、何しても返事ながつ
た。ほして、辛抱づよく、ほこに居て、ほの人を呼んでみたら、

「なんて、あんたていう人は……」

というわけで、みな誤解わがつたて。一部始終話して、「ああ、そうであつたか」
「おまえ、いつから手あるんだ」ていうわけで、今までのこと話し合つてね、ほ
して、その継母が嚴重に処分さつたごど、ほれからほの、お使いに行つたその人
も、ほれ、自分のあやまちを詫びで、ほしてほの一家がらくらく暮したけど。ど
んぴんからりん、すっからりん。

31 ナマズと大助

むがすむがす、関東の方に大きい沼があつて、ほこに主がいて、何だかその主があばれるというたらええつだが、少し動くど、地震が起きて困つた。

「きつと、妖怪変化がいたに相違ない」

て、時の殿さまが、ほれ、へ妖怪変化を退治した者には、存分の褒美をつかわすて。

ほして、あるいは劍客、あるいは一丈ゆたかな男が行つて戦つても、いつの間にか渦巻ができて、ほこさ呑み込まつて、帰つてきた者がいない。不思議なことだ。ほしたらあの人が、

「あばれるたびに地震になるのでは、その妖怪変化の正体はナマズであろう。よし、おれが行つて退治てやる」

ほして、長い刀だと両手で戦わんなねがら、この沼とか、水上、水中では不利だと。片っ方で泳ぎながら、片っ方で刺す短劍がよろしいと、こういうこと聞い

でる。それからナマズに問わず、魚類は自分より大きい者には手向いしない。自分より長いもの――フカなんかもそういうことが多分にあった――んだもんだから、それを聞いた大助という人が、赤い禪を巻いて、口には懐剣をくわえて、ほして、そこさ飛び込んで行って、赤い禪の端を三丈も四丈も流した。ひらひら、ひらひらと流して泳いで行った。はいっ見っただナマズは、ぶったまげた。

自分がこの世で一番大きい勘定しったのが、自分よりも長い、しかも真赤な、ひらひらとして、ゆうゆうと泳ぎ廻るもんだから、不思議なもんだと思ったらしくて、ほして、一回、二回泳いでいるうち、ほれ、見物人だ、

「あらら、あの人も食^かつでしまうはあ、いま少^{つうと}しで死んでしまうべなあ」

て見っただ。ところが、ナマズが不用意にゆうゆうと出て来たところを、四畳半もある禪で、ぎりぎりまきに巻いて、こんどは巻いだどこさ左手でしがみついて右手の懐剣で、めった突きにそのナマズ突いた。ほしたら、さすがの沼の主も、結^ゆつからがつていんべし、突がつていんべし、何とも仕様なくて、グランと白い腹を見せってしまった。ほしてその大助という人が、ぐいぐい、ぐいぐい岸の方さ泳ぎ

ながら引張ってきた。

ほうして、殿さまがら、あつぱれていうわけで、扇で言つて、すばらしく御褒美もらたつた。

それがら、この地方さ、あまり地震ていうのないうなつた。こういう風にいうたけど。どんびんからりん、すつからりん。

32 手長足長

むがすむがす、松代の国に、手長足長ていう、すばらしく大きい奴がいて、いや、農作物は荒らすは、ひったぐり、嵐を起こして台風にしたり、あるいは雲をみな、大きいウチワで、バフバフと叩いてやつて、雨降らせねようにして、旱魃にしたり、まず、ありとあらゆる悪いことさつで、ほとほと、民百姓が困つてあつた。

「いや、このあんばいなら、みんな死なんなねくなる。困ったことだ」

向って戦うどしても足は長いし、手は長いで、体は大きい。勝負にならなかつた。

「いや、なんぼ智恵働かせでも、何とも困ったことだ」

て、みんな溜息ついた。ところがどっからともなく、一人の旅の僧がやってきた。ほして、いろいろ、話の中に、こういう風にして、こう困っているんだていうこと聞いた。

「ほの、手長足長とやら、どこにいるんだ」

「磐梯山の山の方から、おもに来る。あつつの方に住まがいているに相違ない。いや、その大きいごどていうたら、山のかげから顔出して笑ったり、怒ったりする顔はすぎまじい」

山のかげから顔出してわかるぐらいなら、すばらしい大きい手長足長だったわけだ。したら、その坊さんが、

「よろしい、おれあ命にかえでも、手長足長を退治してくれっから」

「いやあ、後のたたりはどうなる」

「あとのたたりは心配ない」

ていうた。おれは、みな責任背負うがらて、まず藁をもつかむつもりで、

「んじゃ、お願いします」

と、こういう風になった。ほうしたら、そのお坊さんが何か呪文となえつたら、たちまち山の方から手長足長が走ってきた。ほして問答が始まった。

ほうしたら、お坊さま、足長さまだの、手長さまだのていふと思つたら、頭から呼び捨てにして、

「これ、手長、足長、きさま、大きくなれつか」

「そんなもの、お手のものよ」

ていうたけあ、雲より高く、大きくなてしました。

「ほう、そうか。んだげんども、大きくなるには大きくなつたげんども、小さくはなれまい」

「そんなもの、お手のものよ」

たちまち、ずっずつ、ずっずつと小さくなった。何と親指ぐらいになったと思つたら、豆粒ぐらいになった。そしたらお坊さま、何か呪文となえて、法力でもつてはあ。ほして、会津の磐梯山のふもとさ埋めでしたはあ。ほして埋めた上さあがつて、数珠で一生懸命拜んではあ、ほしてさっさど立ち去つてしまった。それがら、ほの手長足長、出なくなつた。誰いうどなく、「あの人は、弘法さまでないがったべが」という話残つたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

33 人魚女房

むがすむがす、浜辺に仙吉という人が住んでいだつけど。ほの人が一生けんめい魚獲つてきては、売つて生業なりわいとしていたわけだ。

て、ある時、何だが、その日に限つて、どっちに網打つても一匹もかからね。「へえ、不思議な日もあるもんだなあ」

まず商売はじめてから、こたごどないっだ、こりゃと思って、また別の方さ行つて網打った。何だか重い。一生けんめい引上げてみて、おどろいた。何と人間が掛つてきた。「ありやりや。人間だ、こりや」て。

見たら、しかも若い娘だった。仙吉もほれ、もう年頃であつたもんだから、十分に関心があつたわけだ。て、目つむつてる。

「何かおぼれたんであんまいし」

と思つて、そして胸をはだけてみたら、胸の盛り上がりがすばらしくきれいだった。下の方みておどろいた。下の方がコケラだった。

「あらら、コケラだ」

なているうち、ほの娘さんが目さまして、

「わたしを救つていただいてありがとうございます」

というわけで、

「ゆえあつて、わけは話せませんが、何とかわたしを、ここの次の次の岬さ放していただきたい」

て、こういう風に言うたつて。そして見たら顔のきれいなこと、まず竜宮の乙姫さまみたいな、天女みたいなきれいな娘だった。んだげんども、人魚だべす、そこさ放して呉^やろて言っだもんだから、言うがままに、仙吉がそこさ放してやるわけだ。

ようとして一週間、十日すぎた。

したら、きれいな小娘がきて、ほして、

「何とか、泊めてもらいたい」

こういう風に一夜の宿を請うたわけだ。見だら、ほら、この前見たような娘のようでもあるし、きれいだなあと思つていたもんだから、

「泊らっしゃい」

ていうわけで、泊めたわけだ。ほうしたら掃除、洗濯、ばたばた、ばたばたて、何不自由なくて、ほして、ある時、どちらかともなく結婚の話し合いが始まるわけだ。ほして二人が結婚した。ほんどきの条件として、へ決してわたしがお湯さ入っどこ覗かないでもらいたいと、そういう風に言うた。ほしたら、嫁さんが、

「旦那さま、今日はどこそこに網を打ちなさい」

ほこさ行つて、網打つてみつど、高級な魚ばりだつて、鯛とかヒラメどかて、高いものがいっそう。

「明日はどこに網を打ちなさい」

一々教える。高いものいっぱい獲れるもんだから、たちまちにして産をなしてしまった。金持になった。それをこんど、今までの網元がねだんだ。

「かまねで置ぐど、おれの数倍大きくなつてしまう。この野郎、どうしてああいふ風に大きくなんべ。なぜ知つてんべ」

て。ところが噂ていうな恐ろしいもんで、

「仙吉に來た女房のせいだ。あいつあ、女房に何か仕掛けあるんだて、きつとあれは人魚だかしんね。んでない限り、ほだえほだえ雑魚のいるどころ分かるわけない」

て、ほして、仙吉ば呼ばて、ほして、

「お前のかが、人魚だかも知んない」

そう言^やれば、ガクンと来て、仙吉も、前に自分も人魚を網ですくったな、ころへあるもんだから、「んだらば……」ていうわけで家さ帰^{かへ}つて来た。お湯さ入^いったどこ、そおつと覗^{のぞ}つてみるわけだね。やつぱり人魚だったて。腰から下が魚だったて。たけあ、そいつ見^みらつた女房が、

「あんた、あれほど約束したな、なぜ見^みでけだんだべ。人魚というものは、人間とちがつて、魂^{たま}ていうなないんだ。もう年^{とし}令^{れい}は三百年あつけんども、死^しんでしまえば、海の藻屑^{そうせつ}、泡^うになつて、ただ消^きえてしまふんだ。人間は死^しんでも骨^{ほね}が残り、魂^{たま}が昇^{のぼ}天^{てん}するんだ。わたしもあなたに見^みらつてからは、元^{もと}の人魚になつて、ほして、海の藻屑^{そうせつ}と消^きえるより他にないんだ。これでおさらばでございます」

ていうわけではあ、ほつから海^{うみ}をずうつと行^いつて居^ゐなくなつてはあ、ふうつと氣^き付^ついてみだら、今^{いま}までの富^{とみ}もはあ、何^{なに}にも無^なくなつて、元^{もと}の仙吉になつていたつたて。

んだから、見^みんなていうことは、見^みらんねし、すんなていうことはさんねもんだて。昔^{むかし}は人^{ひと}はいうたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

34 大熊と雄牛

むがすむがす、非常に牛ばかりかわいがる人がいて、ほしてほこの村には、秋の祭り、春の祭りには必ず牛の角の押しくらがあつた。ほして、親父のつくった牛ていうものは、これは骨格はよし、四角四面でまず角はよし、たまげるような牛だつた。なぜこういう風に立派になつたがていうと、貧乏はしてでも、山さ行つてマムシなのせめで来つど、はいつを粉にして、牛の飼料にして食せる。魚の骨もこんがり焼いで、粉にして食せる。んだから骨格がまず違つた。ほれがらドロクロの粕も飲ませて、澄み酒で体拭いでける。ほしてほのフケが非常に体を消耗させるんで、フケていうの、ほとんどなかつた。

いつでも、角押していうと、優勝して賞品もらうがつた。

て、牛も年令十五、六才になつた頃、村一になつて、毎日つれて来たら、マセ棒はね越えて飛び出した。

「あれ、どこへ行くべ」

ていうわけで、ほれ、どんどん、どんどん山の方き走って行ってしまった。不思議なもんだなあて、いざいざでも、かわいい牛のごんだから、追っかけて行ってみた。ほうしたら、山へ山へと牛が行って、結局、野荒しする大熊이었다。その大熊と戦って、大熊もその辺の主と言った者、牛もまず横綱格だった。勝負がつかなくて、延々と戦って、二匹とも、こと切れではあ、死んでしまった。

ほこさ村人が、足の跡たよって行ってみれば、

「ああ、そうか。あの野荒しする大熊退治して呉だか」

というわけで、牛の石碑立てんべというわけで、牛の石碑たでだ。ところが、

「こだえ大きい熊、熊も崇つどなんねえ」

ていうわけで、おクマンサマ（熊野神社）ていうの建てて、二つの神社建ててけだったて。どんぴんからりん、すっからりん。

35 竜宮童子

むかしとんとんあつたけど。

あるところに、貧乏しつたじさまいで、ちょうど、これがら年取りになつて、正月になるていうので、山さ行つて門松切つて、門松、町さ売りに行つたど。ほしたら何とその日に限つて一本も売んねんだど。なんぼ「門松、門松」て触れて歩つても、一軒一軒廻つても売んね。したけあ、じんつあ、

「ああ、仕方ない。売んねごんだら、売んねでええ」
ていうわけで、

「んだらば、竜宮の乙姫さまさ、贈りものでもすんべはあ」
て、ひとまるきまるつて、ばえつと投げてやつた。ほれからずっと何ごともな
くていたんだげんども、竜宮からお使い来て、

「竜宮さ来てけろ。たしかにあなたの贈りものちようだいしました」
と、こいうわけで、竜宮から使いが来て、

「どうか竜宮さ、一献さし上げっだいから来てもらいたい」というわけで、竜宮さ行つて、ほしてすばらしく御馳走になつて、

「これは、一月の部屋、これは二月の部屋、三月の部屋……」

というて、四季折々の部屋の風景を見せてもらつたりなんかして、

「いや、まず御馳走になつて、ええものを見せていただいて、まず、おれも一人身だげんども、周囲の人あ、心配すつどなんねがらつて、帰らせていただきます」
というわけで、帰つて来つど思つたれば、

「お宅に、子どもいねがら、子どもくれてやる」

というて、子ども、丁度、五つ六つのヤロコもらつてきた。ところが、

「じんつあ、じんつあ、この子どもさ、何でも欲しいもの言いつける。何でも出すがら」

「それは結構なもの頂戴して」

というわけで、もらつてきて、家さきた。ほして、まず一番みすばらしい庵いおりみたいなどこさいたまんだから、まず家欲しい。家建てるには敷地いる。そんなわ

けで、〈土地出してもらいたい〉ほら〈家出してもらいたい〉、ほら〈金出してもらいたい〉〈何出してもらいたい〉〈かに出してもらいたい〉で、たちまち長者さまになった。

ところが、前には、ほだに思わねがつたげんども、何だか立派な家さ住んで、ほしてこのええもの着て、ええもの食つてみつど、何となく子どもがみすばらしくて仕樣ないて。汚ならしくて仕樣ないて。

「いまつと、きれいにしろ、こりや」

「ごしゃえでも、きれいにしね。」

「まず、お湯さでも入つて、体でも洗え、まず」

というても、ほだごどしねで、きたないまんまでいる。

したけあ、じさま短氣おこして、追い出してしまつたんだとはあ。したら、追い出すと同時に煙のごとく、パアツと今までの住み家から何から消えでしまつて、元通りの庵の前さ、しょんぼり一人ばり立っていただけつて。んだから、人間ていうな、自分が少し栄達したがらつて、自分と同じぐらいの、元の人ば、見下げだ

り、さげすんだりするもんでないということを、いましめだもんだけど。どんぴんからりん、すっからりん。

36 大歳の客

むがすむがす、年取りの晩に、警女さま来て、ある家さ行って、ええ家なもんだから、

「泊めでけらっしゃい」

ていうたれば、

「おら家では、オナカマなの、泊めね」

ていうたつて。ほんで仕方なくて、貧乏したよなじんつあとばんちやいだどこさ行って、

「こういうわけで、どさ行ってもことわらつて、泊まっどこないから、泊めても

らわんねべか」

ていうたらば、

「こだな家でええごんだら、泊らっしゃい」

ていうたつて。

「んでは、あの、足洗つて来つからつて」

ていうたけあ、なんぼ待つてでも来ね。

「ああ、瞽女さま、目見えねがら、井戸さ入つたんだ。ほんでは」

ていうわけで、がらがら行つて釣瓶上げてみたんだ。ほうして釣瓶さ、銭あ
ごっそり入つて来たつて。探せども尋ねれども、瞽女さま居ねがつたつて。

「ああ、神さまだった。こりや、神さま助けて呉^けんだ」

て喜んでいだつて。

ところが隣のじさまとばさま、はいつ聞いただけあ、次の年はあ、待ち伏せか
けで、瞽女さま、いきなりとつかまえて、

「泊らっしゃい、泊らっしゃい」

「足洗ってござっしやい」

て、こんどは井戸端さ行ったけあ、井戸さつき落としてしまったんだけどはあ。ほして釣瓶つっぱって上げてみたら、うらめしい顔して死んだ譬女さま上がつてきて、ほこでは、こんど人殺しだなて、しばらくだったけど。んだから、人さはやさしくしんなねもんだて、昔の人あいうたど。どんぴんからりん、すっからりん。

37 子の運

むがすむがす、伊勢まいりていうな、みんなした。んで、すばらしい長者の人と貧乏な人ど一緒になったつて。ほしてほこあ、町も宿もないもんだから、神さまの祠をお借りして、ほこさ二人泊った。したら金持の人聞いったらば、ひそひそ、ひそひそと語る。いそいで帰らんなねと二人思っていたのは、奥さんが二人

とも産み月になっていだからだど。んだもんだから、早く帰らんねがった。

したれば、

「今晚、どこそこど、どこそこさ二人子ども生まつだ」

て、神さまだ語っていだんだけど。

「一軒の家さは、青竹三本、授けてきたし、もう一軒の家さは、粟一石、授けてきた」

ていうことは、長者の家さは青竹三本、貧乏人の家さは粟一石授けてきたていうことだけど。はいつ、ちゃんと金持の人が聞いて、貧乏人の人は何も知しやねで、むにやむにや、むにやむにやて眠つだつたて。

ほして家さ帰つてみたら、やつぱり子ども生まつでいた。

で、その子ども成人して結婚するようになったもんだから、何となく一石の粟さ引がつて、ほの長者の家で、その貧乏人の家から嫁もらた。ほうしたれば、何とその嫁は働くやら、まず氣立てはええやらで、ええ嫁だつた。んだげんども、貧乏人からもらったていうの、息子は氣に合わねのつだな。ほうしたらとうとう

出してしまったんだとはあ。

ほうしたれば、出はてつて別などこさ、まず再婚したげんども、ほこではまたすばらしい粟一石授がったもんだから、神さまから、どんどん、どんどん、ええあんばいだったて。

ほうしてはあ、こつちの家ではあ、ほの嫁出してしまったげんど、たつた青竹三本残ったきりで、その青竹ばさいで、簞など作つて売つて、やつと暮さんなねぐなつたつたて。んだから神さまえ授けらつたものつて、なかなか逃れらんねもんだて、昔の人は言うたけど。どんぴんからりん、すつからりん。

38 上洛と下洛 — 一口話 —

少し、小足^{こた}んね人がいで、いろいろ話聞いっだれば、何々の殿さま、上洛したどの、下洛したどのていう話出た。

「上洛、下洛ざあ、どういうことだ」

てきいだら、

「上洛ざあ、登ることだし、下洛ざあ、降ることだ」

て聞いだど。ほうしたれば、間もなく走つてきて、

「どこそこのおつつあんが、柿の木さへ上洛したけあ、間もなく下洛して怪我した」

て、教え来たつて。どんぴんからりん、すっからりん。

39 ヤ ラ — 一口話 —

むかしとんとんあつたけど。

とつても固い人いで、

「あんた、どござござる」

て聞くど、

みがみ

「はい、三上のおんつあき寄って、こういう用足して、ほれがら相生あいおいさ行って、
こういう用足して、ほれがら矢来でこんどあ、こういう用足して、ほれから共同
浴場さ行って、お湯さ入って、こんどあ、法円寺さ廻って先祖さまさお線香つけ
で、ほれからこんどあ、東の街道廻あづまってきて、宮脇に伯母いたから、伯母さ、キ
ミダngoでも買って行って……」

て、はいつあ、嘘こくな嫌いで、その日のことあ全部語る人いだったど。んだ
がら、はいつちや言葉かけるのも大事、かけねも大事。いや困った人なもんだ。
ほして、汗出し出し語るわけだど。

「今日は、どさござるっす」

なて聞くもんだら、頭ええくて、次から次と、とうとうと喋るもんだから、い
そがしい時なの、言葉かけらんねがったど。

ある人教えだど。

「ほんでは、君、正直わがつけんど、言葉かけた人、頭痛くなるんだ、はいつ聞

いてるに」

て、

「ああ、おれもほう思っているんだげんど、まず、少し頭おがしいがして、略さ
んねくて、困ったもんだずあえ、何かええ方法ないか」
ていうたて。

「いや、あるんだ」て。

「んでは、なぜ言うどええなだ」
ていうたば、こういう風に教えたど。

「どさどさるていうたら、へヤラへ さ行ぐていえ」

「へヤラへ さあ、どういうわけだ」
ていうたらば、

「あそこや・ら、ここや・ら」だずも。ほれ。ほれからこんどあ、ほの人行き会うど、
「どさどさる」ていうど、

「へヤラへ さ行ぐ」

いとも簡単だったって。どんぴんからりん、すっからりん。

40 蟹むかし

むかしとんとんあったけど。

じさま、山さ稼ぎ行ったらば、ヤロコべら、蟹捕^すめで、蟹ば一生懸命いじった
り、いじめだりしったて。可哀そうだなあと思って、じんつあ、その蟹ば、何が
しの金で買って、家さ持ってきたて。ほして家の川あたりさ放してで、いろいろ
なもの持って行って食せかった。ほして、

へカニコ ごそごそ カニ来いカニ来い

カニコ ごそごそ

ていうど、蟹コは出はってきて、もの食うのだったって。

蟹、ほこさ飼ってから、ばんちやば無沙汰にして、情が蟹に移ってしまったみ

たいなつて、ばんちや、非常にヤキモチ焼ிட்ட。

あるとき、ばんちや、

「カニ来い、カニ来い、カニコ　ごそこそ

やったげんども、声ちがうから、出はつて来ねがつたど。と、ばんちやも声色使つたど。じんつあと同じ声使つたれば、カニ出はつてきたずも、ほれ。いきなり、おさえてはあ、殺して煮て食つてはあ、ほして、甲羅ば竹やぶさ投げて、鋏ば木の股さ引っかけで、身、みな食てしまったんだど。ほして、知しやねふりしつたれば、じんつあ来たれば、からすあ、

「ガアガア

甲羅　竹やぶ

鋏あ木の股

身は腹の中

て、鳴ிட்டけど。したれば、じんつあ、

「んでは、おら家のばんちや、カニ食つてしまったんだ、こりや」

ていうたったなて。どんぴんからりん、すっからりん。

41 生き行灯

むがすむがす、この殿さまでいうな、いずれの殿さまでも、民百姓のために、すばらしくおめぐみがあつたというよりは、しぼり取つたというのが余計残つているのが、常なわけだ。

んで、あるところの殿さまも例にもれずして、やっぱり搾取がひどくて、ほら年貢、いままでは九尺が一間としたものが、六尺になり、五尺になり、四尺が一間にさつではあ、田がらびりびり、びりびり年貢とり立てるようになった。

〈百姓とゴマの油、しぼるほど出る〉

ていうぐらいで、びりびり絞らつて、橋かけでも丸木橋だと低いもんだから、毎年丸太流さつて困る。何とか板橋欲しいで考えでだつたて。そしてクラで高く

つんで、洪水で流んねようにしたいて、村人考えだげんど、ほの費用がながつた。
しめて三両ぐらいかかる。何とかうまい方法ないべかなあていたれば、村一の智
恵者徳兵衛さんていう人考えだ。

「いや、ある。殿さまなて、あだいしているもんだか、殿さまを舞台にして一芝
居打つべ」

て、村人が相談した。

「われわれがこういう風にして、あれするのも、殿さまからお金お借りするのと
同じだ。結局は……。橋作つて橋渡つて行つてつて、百姓するんだから、殿さま
さ年貢あげるんだから、殿さまも、あれぐらいんどこは、してもら wanna ね。た
だ正面からもらい行つたんでは、殿さまからお金なて頂だいできるわけない」

こういう風にして考えたの、〈生き行灯〉ていうこと考えた。ほして、生き行灯
ていうな、どういふなて言うど、夕方になつどパアツと点いで、朝げになつど
すうつと消える。はいつがほれ、徳兵衛さんの軒場さぶら下がったわけだ。ほし
て、村中の人が下馬評とばすわけだ。町さ行つて。

「いやいや、たまげた。たまげた。徳兵衛さんの軒場さぶら下げっだ行灯が、生き行灯だ。夕方になつどパアツと火点いで、朝げになつど、お天道さま上がつずど、すうつと消えでしまう。すばらしい行灯なもんだ」

したれば、はいつがほれ、どういうわけが、殿さまの耳さ入った。

「これこれ、三太夫。それを見てまいれ」

ていうわけで、二、三日、様子見に來たれば、やっぱり夕方なつどパアツと点く。朝げになつど、すうつと消える。

「これは手数のいらね不思議な行灯だ」

て。して、へかよう、かようでござりまするゝて、報告した。

「うん、三太夫。買ってまいれ」

て、三太夫が買いにきた。

「なんぼだ」「三両だ」

「行灯一つ三両ていうバガな話ない。五両で首とぶ時代に、三両なていうバカな話ない」

て、三太夫がひらき直った。それでも売らねには仕方ない。どき行つて聞いても、「行灯は大したもんだ」というし、「すばらしい行灯だ」というし、殿さまさ行つて再度相談したら、

「苦しくない。買つてまいれ」

というわけで、三両で買ったわけだ。ところがカラクリというのは、火縄さ火点けておいで、はいつが段々燃えて行くど、クマノホクチていうて、火薬でガマの穂ば煮た奴さ火ついで、はいつさつくど、同時に油さ火つくことになっていた。朝げになつたれば、消えんな、油なくなつから消えたんだど。

ほして、

「行灯も生きもんだから、少し慣れるまでは一日、二日かがつかもしんない」
てだど。ところが一日つかね。二日つかね。仕方ない。三日つかね。点くわけないっだな。四日たつても五日たつても、点かね。ほのうち点くか、ほのうち、点くがていいうち、しびれ切らして、殿さまは、

「徳兵衛、呼んでまいれ」

て、こういうわけで、徳兵衛さんが呼び出さっただけだ。

ほしたら、村人は心配したんだとはあ。

「ああ、あいっあお仕置きになる。三両の金をもらったげんども、困ったもんだ」
と思っただって。したれば徳兵衛さんが殿さまどこさ引張って行がっで、行くより早く行灯さ行って、

「あらら、行灯、お前死んだんだどれはあ。殿さま、何も食せて呉ねがったが。水も飲ませて呉ねがったが。ほんでは、十日も飲まず食わず、お前生きていらんね、生き行灯が死に行灯になったんだはあ」

殿さま、何にもして呉ねな、自分の落度だずも。ほれ。ほんでやむを得ながつたって。して、とうとうそれで板橋掛けで、ゆうゆうと暮したんだってな。どんぴんからりん、すっからりん。

42 大歳の火

むがすむがす、年とりの晩に火種ていうもの切らすもんでないと、こういう風に言うたもんだって。ほして姑かあちゃんから、嫁さまが、

「来年から、お前、火起こせはあ。火焚いで、いろいろなことやれはあ」
て、申送り受けて、ほしてまず、

「今日から、まず火絶やさねようにすんなね」

ていうわけで、太つといぶっこい（株）さ火止めにするようにして、桑の木とか樫とか固いのさ火止めして、まず夜もろくろく寝ねで、朝げん焚き付けんかねなど思っていたら、とろとろつと眠ってるうち、ほこのおかちゃんが、根性われおかちゃんだか、手桶の水みなかけて消してしまつたんだどはあ。火つけんべと思つて朝げ行つてみたれば、ぐじゃぐじゃなつてで、火つくどこでない。嫁あ、

「いや困つたことなつたもんだ」

何とも仕様ないもんだから、表さ出はつてみたれば、向うからふうらりふうら

りて、灯りつけて来る人いだっけど。ほごさ行つて、

「こういうわけで、火ちようだいさんねべか」

ていうたれば、

「いや、火あげっけんど、条件がある」

「なんだべ」

ていうたらば、

「この棺桶を引き取ってもらわんなね」

て。はつとたじろいだげんども、火ないには増しだべと思つて、

「んだらば、はいつ、上段さ、おあずかりします」

て、床の間あつどこさ、ほの棺桶あずがつて、火焚いだわけだど。したれば、

姑かか、不思議しつたんだど。

「あれほど、しつちやかめつちやか、やつつけどの、よく火焚いだ」

と思つて。

「よく、お前、火焚いだな」

ていたげんども、そおつと亭主さだけ話したんだど。

「こういうわけで、ゆんべな、棺桶引きとつて呉ろて言わっだ」

「馬鹿、棺桶引きとつたなて……。引きとつてから仕方ない。んだら行つてみんべ」

ていうわけで、開けてみんなべと思つて片方持たがつたれば、ジャラジャラ、ジャラジャラというけあ、大判小判がざくざくと出てきたつて。どんぴんからりん、すつからりん。

43 雪 女（つらら女房）

ある寒い晩に、そこにじんつあとばんちやばり暮しつたけど。

その寒い晩に、道通つて来たれば、道の脇にちよこんと坐つてだ小娘いだっけど。ほして、ほの小娘、

「お前、なにしまったんだ」

て聞いだれば、大した話もすね。

「んだら、家さ行つて話しろ」

ていうわけで、家さ連^せて来て、ほしてまず、温かい御飯食つたらええがんべの、ほら、何食べだらええがんべていうたら、

「温かい御飯、きらいだ」

「ほだら、風呂さでも入つたらええがんべ」

ていうど、

「風呂はきらいだ」

ていうわけで。んでも、ほれ、掃除したり、洗濯したりして、小まめに働いっ
だんだど。ところが、ばんちゃ、

「お前、なんぼなえだて、若い身空で、風呂さ入ねなていらんね」

なて言うわけで、びりびり風呂さ入つだんだど。ほして行つてみたれば、赤い
櫛一枚と、雪の塊が一つ浮ぎつただけだ。んだから、はいつが雪女だったなあ

ていうたったなて。どんぴんからりん、すっからりん。

44 目あきとめぐら

むがすむがす、天竺の国で、目あきとめぐらが馬さのつて旅したんだと。
ほしてあるどこさ泊^めつたれば、目くらが、

「ええ答^め見^めけだ」

てだど。「なして」ていうたれば、「馬がものすごく、言うこと聞く」て。

ほうして、目あきが見たらば、ほいつ、マムシなんだけど。

大陸ていうのは、日中、非常に温かいげんども、夜はほとんど零度近くなるも
んだから、蛇^{へび}なの、みな、棒^{ぼう}みたいになるものよ。ところが目あきが教えたど。

「お前、ほいつ、馬、ええあんばい走^{はし}るて言うげんども、ほいつはマムシだ」
て。したらば、

「騙^{だま}さんね。目あきが今まで、おれば騙^{だま}してきたから、今度は騙^{だま}さんね。こだえ

ええ筈あるもんでない」

ほだえているうち、太陽出て温くなたらば、くつつがつて毒廻るわけだ。

「だから、あれほど、おれ、忠告したのに、なんで聞かんねがった」
ということだ。どんぴんからりん、すつからりん。

45 茶 の み

ある殿さまが非常にお茶のみ好きで、ほして、

「この城下に、どのぐらいお茶のみする人いだ」

というわけで、余計お茶のんだ人には褒美を出すというたつて。

したらば、あるトンチのええ人が、お茶の実ば一斗五升かついで、

「一斗五升のお茶の実でございます」

で行った。そして殿さまの前さ行ったわけだ。

「いくらのお茶のみだ」

て聞いたって。

「一斗五升にござります」

「一斗五升なて、ほだえいっばい入るが」

ていうたって。したら、

「這えます、這えます」

て、のたのた、のたのたて這ったていうんだな。そのトンチに殿さまも感服して御褒美くれだったって。どんぴんからりん、すっからりん。

46 寝てて食われる

むがすむがす、あるところで論判はじまったって。

「寝てで食われっことある」

「寝てで食われるっていうことはないべなえ。寝でで錢になるっていう女郎衆の話は聞いたことあつけども、寝てで食われるっていうことないべなえ」

して、論判してるうち、蚊に食わっただんど。

寝てでも食われるっていうのは、寝でで蚊に食われるっていう話だけずも。

47 食わず女房

むがすむがす、あるところに、とってもけちんぼで、まず、おかたさも御飯食せったくないほどのけちんぼいだんだけど。ほして、人が仲人すつど、

「御飯食ねで稼いで呉んのだら、いつでも貰う」

ていうたつて。

ほうしたら、ほこさ、ある時、きれいな女来て、ほして、まず口なの、おちよぼ口で、御飯、横に入らね。タテぐらいしか入らねちっちゃこい口でだど。ほう

して来て、働くは働くは、まずたまげるほど働ぐんだど。

ほしたら、その若衆はよろこんで、

「いや、おら家のかあちゃんが、御飯食ねで働く」

こうだ、ああだて、みんなさ自慢したんだど。したらみんな言うたど。

「べらぼう、今どき、ほだな人間いるもんでない。何かの妖怪変化だぞ、気付けろよ」

ていうたつて。ほして稼ぎ行つたふりして、そおつと見たれば、何と、はいつあ口裂け女で、耳まで口さけで、居ねどき御飯なの一人して炊いで、ヤキミシなのストン、ストンと、一つまんま生き吞みするようなだけど。

はいつ見たけあ、恐くなつて逃げだんだど。その若衆あ、どんどん逃げだれば、悪女の深なさけていうつだが、はいつあ追っかけて来たんだど。どんどん、どんどん追つてきて、いや、なえつたて逃げらんねはあていうわけで、道傍の脇の草むらさ、ちよろちよろ入つて行つて、まず這つて逃げて行つたんだど。したば、なぜか女が追つて来ながつたど。

「ふしぎなこともあるもんだなあ」

と思つたれば、菖蒲とヨモギ畑さ逃げたていうんだな。ほしたれば菖蒲とヨモギくさくて追つて来らんねがつたど。ちょうどその日が五月節句であつたど。んだから五月節句は今でも菖蒲とヨモギをさすんだ、口裂け女来ねようにさすんだというどこもあるけど。どんびんからりん、すっからりん。

48 鼻 高 扇

越中富山の薬屋さんが、ずうっと薬売り歩いて、

「ここらで、まずはあ、売り止めにしてはあ、明日また次の宿さ行つて売んべはなあ」

ど思つて、次の宿で、売るところさ行つて泊つかなあと思つて、パツカリパツカリ行つたらば、

「もうし、もうし」

ていうた。ちえつと振返ってみたげんど、姿見えない。おかしいなあ……。

「お前は薬屋でないか」

「はい、薬屋でございます」

ていうたならば、バサツと落つできたのは、天狗さまだったて。何となく元気ない。

「これ、薬屋、腹いたの薬持たねが」

持たねていうど殺されつど思つて、見たれば、風邪薬やいろいろな点けたりする薬あつけんど、腹いたの薬だけは切らしたけど。

「はて、困つたもんだなあ」

ど思つて、やつぱりほに、命がけで考えるていうことはよくあつて、はつと考えたのは、お神樂がヒョットコ面、お獅子にくつつがつで、足さ目クソ鼻クソついで直す場面があるわけだね。そいつ思い出したど。んだもんだから、「あります」といふて、いきなり目クソと鼻クソと、カッタンと、ほしてここらから垢なの、

みなとつて、ほれ、長旅なもんだから、金玉などにかすたまつていだの、みな一緒え丸めでやったらば、たちまち天狗は腹いた治ったんだど。

「いやあ、治つて気持ちええぐなつた。天狗の社会には金というものはない。んだげんども、薬屋、こだえ効く薬呑んだことはない。何ていう薬だ」

て聞いたど。したら、はいつに困つてね、

「赤タンキンコクレていう薬だ」

ていうたつて。垢とタンと金玉こすつた垢だからね。

「ああ、効くもんだ。んだらお前さ、羽根の団扇やつから。これはまた、これであおぐど、鼻高くなつたり、低くなつたり、なぜでもなるんだ」

「んでは、ありがどさま」

ていうわけで、まず、はいつ大事にして家さ持つてつて、どつちかていうど、家のかあちゃんや鼻べちやの方だつたずも、ほれ。んだから子どもまで鼻べちや多がつたなて、はいつば、ええあんばい直して、パフパフと仰いでやつたれば、器量ええぐなつたつて。子どもも器量ええぐなつたて。ほの話聞いたらば、わんさ

かわんさか、鼻の格好われな来て、たちまち長者さまになった。

して、ある時、ほの、杉の木の下で寝転ろがえりながら、春先、ずうっと空眺めった。

「あの雲まで、伸ばして呉^けましょう」

という野心おこして、一生けんめい仰いだれば、スルスル、スルスル伸びで、雲からニョキツと出てしまたわけだど。ほうしたれば、ちようど雷様の一家の家さ出て行つて、雷様の母親と娘がいて、

「ああ、松茸出てきた」

ていうたつて。ある時、たつまきで、松茸吹つとんで行つて、はいつ、ほの雷様が食つたれば、すこぶる美味がつたていうんだな。香よし味よしで、んだがらほの、また松茸吹つとんできたと思つたらしいんだな、娘あ。んだらばていうので、焼けた火箸通してみるていうわけで、焼け火箸通さつだもんだから、アチチ……ていうわけで、ほんでこんどは短くなるように願つて、ほしてやつと届いて、くるくる、くるくる廻つて、ほっから下さ落つてしまつたて。ほして、落ち

る途中で尻がねじつでしまつて、田螺になつたていう話もあつす、薬屋がカタツムリになつたていう話もあるんだけど。どんぴんからりん、すつからりん。

49 二十四孝

むがすむがす、二十四孝、寒中に竹の子掘つた話、ほれがら、舅と姑が病氣したときには嫁が自分の乳を与えて、はいつ治すていうな、何よりの親孝行だていうので、そのためには自分の子ども殺さんなねわけだど。自分の子ども、殺そうとして、埋けんべと思つて掘つど思つたれば、金の茶釜でてきて、ほいつでいろいろなもの買つて、殺さねでしまつたていう話も、二十四孝の一つだけんども……。

貧乏でカヤ買う錢もないがつたど。ほんでお父さんとお母さん、蚊に食われるに大變だていうので、若者が自分の体さチャン酒ていう支那の酒、蚊は酒好きだ

もんだから、じんつあとばんちやの蚊一手に引受けて、蚊帳の代役つとめだていうのも二十四孝の一つだど。どんびんからりん、すっからりん。

50 旅人と大蛇

ある人が山さ木伐りに行ったらば、何だか、旅人あ、あわでで走って来^くつけて。どんどん、どんどん走ってくる。

「なにして、ほだえあわでで走ってくるんだべ」

ど思っていたら、ほのうしろから大蛇追っかけて来たんだけど。

「あらら……」

と思っているうち、大蛇、はいつば呑みはだたど。ほうしたけあ、旅人、一生けんめい、こだごとしったけあ、蛇の口押さえっただけあ、体力つきて、ぺろっと呑まっでしまった。呑んだ大蛇、細くていだところから、ぼこっと呑んだどこ太

くなつて、ほんで苦しんで、苦しんでだ。「はあ、あんまり大きな呑みすぎで苦しんでだな」と思つて、その稼ぎ行つた人見つたれば、キクバオーレンないうようなもの、山の道傍にある草、ばくばく食つたけあ、たちまちにして、出っぱりがすうつと消化してしまつたんだど。はいつ見ただけあ、

「ははあ、これあ、消化ものすごいする草なもんだ、よし」

というわけで、はいつにヒントを得て、ほこの長者さまでいうな、ソバ食いの一番手なもんで、折々余計ソバ食つた人さ、田地二反歩くれるなていうほど頑張つていんなだけど。「田地二反歩、いただきたい」というわけで、長者さまとソバ食いになつたわけだど。

たちまち、長者さまより余計食つてしまつて、まだまだ、まだまだ食う。キクバオーレン、ちゃんと手元さ持つて行つたもんだから、大丈夫だ勘定して、ほれ。

ほして、ゆうゆう勝つて、キクバオーレン飲んで、

「ほんじゃ、ご不浄かしてけらっしゃい」

て。なんぼ待つてでも、来ねんだど。

「おかしいこともあるもんだなあ」

て、その長者さま、便所さ行ってみたれば、着物とソバだけ残って、人間がすぱっと溶けっただけはあ。んだから、「あの草は消化するには消化すっけんども、人間ば溶かす草だったなあ」ていうたったて。どんぴんからりん、すっからりん。

あとがき

「佐藤家の昔話」(十五)は正月四日にお邪魔してお聞きしたものである。松の内の気分も抜けぬうちの訪問で恐縮をしたが、考えてみれば、正月こそ昔話の「語り」の日々であつたともいえて、話者の佐藤さんには申し訳ないことと思ひながら、よい正月を迎えたものと喜んでいるところである。

佐藤家の昔話集はすでにガリ版十四冊を数え、話数は五四九話に達しているが、こんどの『竜宮童子』によつて、何と五九九話に達し、世間話とも噂話ともとれる話二話もあるので、全部で六〇一話に達することになる。

お会いした佐藤さんが、一つ思い出したことがあるといつて話して下さったことに、「昔というのは〈作を入れたりしない〉ものだ。作を入れるのは芸人で、昔は静かに淡々と語るものだ」と祖父から言われたことがある」という。あるものがあるように語るのが芸人でない昔語りというものだというほどの意味だろうと、大変興味深く感じたことであつた。限らない感謝をこめて、この十五冊目をガリ

版にした。大方の御批正をお願いしたい。

一九八〇年一月十五日

武田 正

竜宮童子

佐藤家の昔話(十五)

昭和五十五年一月十五日 発行

編者 武田 正

南陽市赤湯旭町三二八〇の四

東北文教大学短期大学部民話研究センター資料叢書

竜宮童子 佐藤家の昔話(十五)

*本書は、ガリ版刷りで作成された原本を活字化したものです。

平成二十三年十二月二十日

東北文教大学短期大学部民話研究センター

〒九九〇―二三二六

山形市片谷地五一五

東北文教大学・同短期大学部附属図書館内

(電話)〇二三―六八八―七五四四

- 『西川町の昔話』(一九七五年九月発行、二〇〇六年三月再刊)
『むかしあったけど』(一九七五年二月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市築沢の昔話』(一九七二年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『米沢市塩井の昔話』(一九七三年十一月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(一)』(一九八四年四月発行、二〇〇六年三月再刊)
『安楽城の伝承(二)』(一九八五年四月発行、二〇〇六年六月再刊)
『安楽城の伝承(三)』(一九八五年十月発行、二〇〇六年六月再刊)
『高畠町和田の昔話』(一九七九年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(一)』(一九八〇年八月発行、二〇〇六年七月再刊)
『及位の昔話(四)』(一九八〇年十二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『及位の昔話(五)』(一九八一年二月発行、二〇〇六年十月再刊)
『佐兵ばなし』(一九七一年一月発行、二〇〇七年四月再刊)
『まま子いじめ 米沢市六郷・宮井の昔話(一)』(一九七四年四月発行、二〇〇七年四月再刊)
『かっぱの硯 長井市・米沢市六郷の昔話』(一九七四年七月発行、二〇〇七年四月再刊)
『行けざんざん 小国町昔話集』(一九七六年九月発行、二〇〇七年四月再刊)
『お婆の手ん箱(一) 阿部キヌオさんの語り』(一九七七年四月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(二)』(一九八〇年九月発行、二〇〇七年七月再刊)
『及位の昔話(三)』(一九八〇年十月発行、二〇〇七年七月再刊)

- 『牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第一集』(一九六八年三月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第二集』(一九六八年十月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『続々牛方と山姥 海老名ちやう昔話 第三集』(一九六九年一月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『牛方と山姥(四) 海老名ちやう昔話 第四集』(一九六九年四月発行、二〇〇八年一月再刊)
- 『飯豊町昔話集―大平・新沼・高畑―』(一九七一年九月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『蛇むこむかし しらたかの民話』(一九六六年二月発行、二〇〇八年四月再刊)
- 『お杉お玉 小国町昔話集(一)』(一九七〇年二月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『さとりのお化け 小国町昔話集(二)』(一九七〇年八月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『鬼と豆のくいくら 小国町昔話集(三)』(一九七〇年十月発行、二〇〇八年六月再刊)
- 『田の中の田三郎 近きよ姫昔話』(一九六九年八月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『お糸唐糸 故安部忠内翁／安部はつよ姫 米沢の昔話集』
(一九六九年九月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『つゆふじの伝説 安部忠内・稿』(一九六九年十一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『さるむこ 田沢の伝説と昔話』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『ちようじやのむこ』(一九七六年一月発行、二〇〇八年十二月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(上)』(一九七〇年十二月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『飯豊山麓 中津川昔話集(下)』(一九七一年一月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『木小屋の生活 民話序説』(一九七二年四月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『カマイタチ 東根昔話集2・置賜昔話補遺』(一九七二年五月発行、二〇〇九年七月再刊)
- 『川崎みさをさんの昔話』(一九七九年一月発行、二〇〇九年七月再刊)

『なら梨とり 赤湯の昔話』(一九六七年一月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(一) 民話のこころ(対談) 浜田広介先生と海老名ちやうさん』

(一九七一年四月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『置賜平野の昔話(二) 海老名ちやう昔話補遺』

(一九七一年八月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『たかみねと秋田の昔話』(一九七八年二月発行、二〇〇九年十二月再刊)

『佐藤家の昔話(一) 山形県上山市檜下』(一九七二年七月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鳥吞爺 佐藤家の昔話(二)』(一九七二年九月発行、二〇一〇年七月再刊)

『鉢かつぎ姫 佐藤家の昔話(三)』(一九七二年十二月発行、二〇一〇年七月再刊)

『天とひばり 佐藤家の昔話(四)』(一九七三年三月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『へらへら話 佐藤家の昔話(五)』(一九七三年七月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『夢のほたる 佐藤家の昔話(六)』(一九七三年十一月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『ぬるくす男 佐藤家の昔話(七)』(一九七四年十月発行、二〇一〇年十二月再刊)

『蛤姫(上)(下) 佐藤家の昔話(八)』(一九七五年四月発行、二〇一一年七月再刊)

『おとぎり草 佐藤家の昔話(九)』(一九七五年七月発行、二〇一一年七月再刊)

『ゆき女 佐藤家の昔話(十)』(一九七六年二月発行、二〇一一年七月再刊)

『ねずみの角力とり 佐藤家の昔話(十一)』(一九七六年七月発行、二〇一一年十二月再刊)

『かみなが姫 佐藤家の昔話(十二)』(一九七六年十一月発行、二〇一一年十二月再刊)

『山鳥むかし 佐藤家の昔話(十三)』(一九七七年九月発行、二〇一一年十二月再刊)

『和尚と天狗 佐藤家の昔話(十四)』(一九七八年八月発行、二〇一一年十二月再刊)

『竜宮童子 佐藤家の昔話（十五）』（一九八〇年一月発行、二〇一一年十二月再刊）